帝國實業讀本

巻四

3759
Ha7
資料室

42534
教科書文庫
4
810
44-1933
200030
2/02

文部省檢定濟

昭和八年八月二日　實業學校國語科用

文學博士　芳賀矢一　編

文學博士　上田萬年

文學士　長谷川福平　訂補

帝國實業讀本

東京　合資會社　冨山房發兌

資料室

3518
1797

聖徳太子　和田英作筆

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
39118
図書

帝國實業讀本 巻四

目次

一 四方の海（明治天皇御製）……一
二 明治天皇の御製に就いて……四
三 健康な秋の大地……川路柳虹……八
かねたゝき（自修文）……薄田泣菫……一四
四 古名將の學問……湯淺元禎……一八
五 本居翁の遺蹟……二六
六 揚子江の秋……南部修太郎……三四
七 夕もやの野（詩）……中西悟堂……四二
八 鷹が渡る……野村傳四……四四

九 我が家の富……徳富健次郎……五〇
一〇 篤實……橘南谿……五四
一一 土器賣る翁……柳澤淇園……六二
心の洗濯（自修文）……柴田鳩翁……六三
一二 伐木……吉江喬松……六八
一三 雪の日本アルプスを廻りて……（東京朝日新聞）……七四
一四 日章旗と水戸烈公……木宮泰彦……八二
一五 國歌の話……田邊尚雄……八八
元日（自修文）……夏目漱石……九五
一六 清淨の國……大町桂月……一〇〇
一七 伸びて行く力……小林一郎……一〇五
一八 青年と勇氣……深作安文……一一〇
一九 師の恩……柳澤淇園……一一八

二〇 春の水（川柳）……一二〇
二一 本多重次……新井白石……一二二
二二 誠といふ説……三浦梅園……一二七
延喜天暦の帝（自修文）……中村孝也……一三四
二三 杉田壹岐……室鳩巣……一四〇
二四 諫を喜ぶべし……貝原益軒……一四八
二五 告天子……薄田泣菫……一五四
二六 ふじの山（狂歌）……一六二
二七 哲人聖徳皇太子……高島米峯……一六五

帝國大學圖書之印

帝國實業讀本　巻四

一　四方の海　（明治天皇御製）

四方の海みなはらからと思ふ世に
　など波風の立ちさわぐらん
かし原のとほつ御祖の宮ばしら
　たてそめしより國は動かず
照るにつけ曇るにつけて思ふかな
　わが民草のうへはいかにと

子らはみな軍のにはに出ではてて
おきなやひとり山田もるらん

世とともに語りつたへよ國のため
いのちを捨てし人のいさをを

政いでて聽く間はかくばかり
あつき日としも思はざりしを

よりそはんひまはなくとも文机の
上には塵をするゑずもあらなん

さし昇る朝日の如くさわやかに

おのがじし
なりはひ

もたまほしきは心なりけり

家とみてあかぬことなき身なりとも
ひとのつとめにおこたるなゆめ

おのがじし務ををへし後にこそ
花のかげには立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん
賤がなりはひいとまなくとも

とこしへに民やすかれと祈るなる
わがよをまもれ伊勢のおほ神

凌駕す

鴻業

(一)藤原家隆。新古今集撰者の一人。嘉禎三年(一八九七)歿、年八十。

(二)古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新敕撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の二十一代和歌集。

精力絶倫

二　明治天皇の御製に就いて

明治天皇の御製が十萬首もおありなさるといふ事は、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事績の一として、驚歎し奉るより外はない。大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも一の神業である。古來、最多作の歌人と言はれた家隆(一)卿さへ、天皇に比べ奉れば、物の數でもない。歷代の敕撰二十一代集(二)の歌の數が總數三萬數千首、その幾倍の數を御一人で御作り上げになつたのは、眞に人間業ではない。かばかり多數な御製が、最も多事な明治の御治世に於て、萬機御親裁の餘に成つた事を考へ奉れば、その御精力

班に進む

語草

拜誦する

の絶倫であらせられた事、何時の世、どこの國にも類例はない。皇威を四方に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進めあそばした大業と共に、言の葉の道に於ても、空前の偉績をお示しになつた事は、億兆の欽仰し奉る所、千代萬代かけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられた事は言ふまでもないが、かばかり多數な御作のあつた事は、平素何等の娯樂をも近づけ給はず、酷暑、嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出もなく、常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが卽ち和歌であつたからである。これを思へば、實に恐多い事で、且またその神々しい御性格を窺ひ奉る事が出來る。御製を拜誦し奉

風調
(一)Theodore Roosevelt. 第二十六代の大統領。(西紀一八五八—一九一九年)
動機

る者は、一言一句、これが卽ち萬機親裁の餘、お寛ぎあそばされた御日常の御慰安であつた事を拜察しなければならぬ。

日常の御慰安の爲にお詠みあそばされた數々の御詠、その風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐ませ給ふ上御一人の御作と窺はれる。國を思ひ、民を憐ませ給ふ大御心は、常に御製の上に現れてゐる。一首の歌が米國大統領ルーズベルト[一]氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にも勝れた力を示したもので、和歌始つて以來未曾有な事である。まして七千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に至つては、何等の經典もこれに並ぶ

典範
起草
玉の御聲
草莽の微臣

物はない。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、これ程の貴さが、何時の世、どこの國にあらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すのである。しかし、詔勅にはそれぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のある事も明白である。御製は直ちに大御心から發したもので、これを拜誦する者は、卽ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福である。

(一)詩人。名は誠。明治二十一年東京市に生れた。路傍の花、勝利、マチス以後等の著がある。

三　健康な秋の大地

川路柳虹(一)

秋の自然の特徴とも言ふべきは、空氣の澄んで、冷徹な底に一切の色彩が鮮かに映る事である。いはゆる「天高く馬肥ゆ。」といふ言葉の通り、空は遙かな彼方の上にその碧をたゝへてゐる。しかし、この澄んだ天空、冷徹な空氣、晴れやかな色彩も、秋の季節と共に生れる物ではない。夏から秋への移り變りに起る颱風の一過し、燃えた焰をうち消す樣にして、「夏」の姿を掻亂す嵐が、何時か冷やかな空氣をもたらすと共に、濁つた水蒸氣の多い溫い空氣が一掃されて、冷く晴れやかになつて來る。それからその嵐と共に起る雨――時には、既

秋霖

(一)sports.

凋落

に秋霖とも思はれるくらゐな長雨が、十月頃まで續く事もあるが、その雨によつて濁つた空氣は一層清められ、冷い氣溫と共に、自然の姿を更に澄んだ清い物にする樣である。

秋の詩趣には、要するに二つの要素があらう。卽ちこの澄んだ聖者の瞳の樣な清高な秋、そして收獲の秋、果實の實のり稻の穗のたわゝな秋、スポーツ(一)の秋、散策の秋――それ等は快活で光明的な秋の側面である。しかし、この反面は凋落の秋、すべてが、やがては滅亡へと急ぐ事を思はせる秋、たとひ木の葉の色づき果實の熟する赫かしさ樂しさはあつても、それは一瞬の光耀に過ぎない事をも感じさせる無情の秋、悲愁の秋である。古來我が國の文學に表れた秋の情趣は、

(一)新古今集にある西行法師の歌。
(二)芭蕉の句。
蕭々

どちらかと言へば、皆この凋落死滅の悲哀をのみ悲しむ「秋」ばかりである。「(一)こゝろなき身にもあはれは知られけりしぎたつさはの秋の夕ぐれ」とか、「(二)枯枝に烏のとまりけり秋の暮」とか、さういふ寂しい蕭々とした情趣のみである。實際遠い田舍の野路などで行暮れて、身の丈よりも伸びた野の草の蕭々と生えてゐる彼方に、薄れ行く落日の影などを眺めて、昔の旅人などは誰しも、「あはれ」といふ感情をこの自然から直觀したに違ない。しかし、それは今日鐵路の縦横に走り、村落や都市の所在に點在する現代の野からは、それ程思ひ詰めた「あはれ」とも言ふべき情趣は見出せまい。我々は寧ろ輝く木の葉の美を愛し、散策に渇いた喉を冷い溪流で潤し、ス

(一)sportsman.
寛闊
眞個

ポーツに疲れた體を野の草の上に横たへて、高い天空を仰ぐ愉快を感ずる方が餘程自然である。悲しむだけが「詩」を知る事ではない。秋の色の美しさを畫家の樣に賞し、秋の野の快さを(一)スポーツマンの心の樣な寛闊さで味はふ事が、現代の青年として眞個な秋の詩趣を知る事ではあるまいか。私の「郊外秋景」といふ小詩を引いて、秋の野の姿をしのぶとしよう。殊に武藏野は「秋」によつて始めてその尊さが知れる。我等の郊外の秋は、決して寂しく悲しいものではない。

電車から見る廣い地と蒼空。
都會がその折りかさなる屋根を
次第々々に低めて行き、

翼を息める小鳥のやうに、
まばらに地の上にうづくまる
小さい町外れのあばら家。
それに連なつて展開する
碧の菜畑と低い木立と、
そして食鹽のやうに白い小徑が、
小高い丘のあたりに消えると、
其所には草葺の屋根にまじつて、
赤い屋根の可憐な洋館が、此所にも、彼所にも、
童話の中の家のやうに見え隠れる。
秋は高く澄んで空につぐみを鳴かしめ、
都會へ通ふ荷車の響もさわやかに、
ゆき交ふ電車の中で子供は

小旗を振つて「萬歳」を叫ぶ。
新しい木の香の匂ふ貸家が、
かはいゝ停車場の側にふえ、
不斷にとんかんと鑿の音が、
あたりの靜かな空氣を動かす。
健康な大地は一齊に黃金に輝き、
熟した木の果は樹蔭に充ちて、
採る人の手を待つてゐる。
「野に出でよ。」といふ聲が、
自然のどこからか聞えて來る。
この惠まれた秋の郊外に、
友よ、すこやかな日光と空氣とを、
思ふさま吸はうではないか。

自修文

かねたゝき

薄田泣菫（一）

　私たちの身近く使つてゐる道具で、これまでは何の見どころもなく思つてゐたのが、ふと氣が附くと、眼のとゞかなかつた邊に捨てがたい趣があるので、今更の樣にそれ〴〵に心を牽かれる事があるものだ。

　丁度その樣に、仕事や考へ事に疲れた頭をもち上げて、何心なくあたりを見廻した時などに、これまで思ひもかけなかつたしんみりとした雰圍氣を、自分の周圍に感じて、覺えずほろりとさせられる瞬間がよくあるものだ。

　今日正午過、私は讀みふけつてゐた書物にも飽きたので、日あたりのいゝ緣側に出て、其所にあつた籐椅子にからだを投出した。今までついぞ氣にも留めなかつたが、あたりの大氣は、水の樣に澄みきつて靜かだつた。時をり木犀の匂がたよ〳〵とそこらに漂つて來たが、霧の降る樣に一足毎にしんみりした冷さをまき散して行くその匂の動が、一層あたりの靜かさを深めて行つた。何か嚴かな式の始るのを待つてでもゐる樣に、庭さきの立木も、草花も、そこらに散らばつた落葉も、また部屋の中の色々な道具も、きちんと居ずまひを直し、固唾を呑んで身動一つしなかつた。

「靜かな日だな。こんな日には……」

　私の口の中で何か言はうとして、次の言葉を忘れた樣に、そのまゝ默つてしまつた。そして自分の持つすべての感覺を受身に、いゝ氣持になつてこの靜けさの中に浸つてゐた。青白い魚の腹に感じられる樣な憂鬱と冷さとは、私の額から、手の平から、また足の裏から傳はつて、心の奧までも廣がつて行く樣に思はれた。

（一）詩人。名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。茶話、草木蟲魚、大地讃頌等の外、暮笛集、ゆく春、泣菫詩集等の著がある。

たよ〳〵　力の失せてなよなよとした樣。

居ずまひ　坐つたさま。ゐざま。

固唾を呑む　心をこめて事のなりゆきを待つにいふ。固唾は心をこめて事の結果を待つ時などに口中に溜る唾。

すべての感覺を云々　見たり、聽いたり、嗅いだり、觸れたりする所のはたらきを特にはたらかせず、外界の刺戟をそのまゝ受入れる樣にする意。

とんぼがへり　蜻蛉が烈しく進んで急に後へ返る樣に、輕く身を後にひるがへすこと。

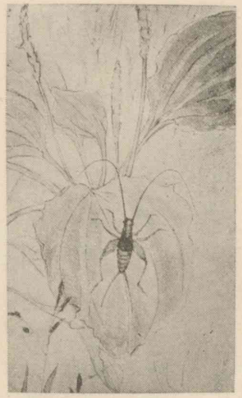
(一)(天鵞絨)　ポルトガル語(Veludo)の訛。

小やみ　しばしやむこと。

「ちん……ちん……ちん……ちん……ちん……」

どこからともなく金屬性の細かい聲が聞え出した。

黃金の盤(さら)の上に、小粒の寶玉を、一つ〳〵少し間をおいて滴(したゝ)らす樣な響で、その寶玉の粒々は、ちん、〳〵と、それ〴〵の美しい音を立てて轉がり落ちたかと思ふと、魔物か何かの樣に、盤の中でとんぼがへりをうつて、そのまゝしつとりとあたりに垂れてゐる「靜寂」の重い(一)ビロードのひだに紛れこんで行くのだ。



かねたゝき

「ちん……ちん……ちん……ちん……」

小(を)さな寶玉の粒々は、小やみもなく金の盤に轉がり落ちてゐる。その金屬性の澄みきつた響は、冷い螢の光の樣に、絶えず光つては消え、光つては消えしながら……

かねたゝき　直翅類の昆蟲。體長三分許、鞭狀の觸角がある。秋、樹の枝や枯葉の間で美しい聲を出して鳴く。

明障子　普通の紙をはつた障子のこと。ふすま障子に對して言ふ。

念佛行者　念佛を唱へて佛道を修め行ふ人。念佛とは佛の功德を稱へ、或はその名號を唱へること。

何といふ靜かな、寂しい、簡素を極めた聲だらう。

問ふまでもなく、かねたゝきが鳴いてゐるのだ。

蟲はそこらに散らばつた落葉の下か、明障子(あかりしやうじ)の棧の蔭かに隱れてゐるらしかつた。だが、私が一足その方へ近づきでもすると、敏感な彼はすぐに鳴き止むに相違ない。子供の頃から搜しても搜しても、搜しきれなかつたこの蟲は、私に取つては一つの不思議な存在に外ならなかつた。

「ちん……ちん……ちん……」

信心な念佛行者が、薄暗いお堂の中でつゝましやかに祈念をこらすをりの樣に、蟲は唯もう一心に、ちん〳〵と鉦(かね)を叩いてゐる。

かねたゝきは何を祈り、何を歌つてゐるのだらうか。

（一）江戸時代の儒者。字は文祥、號は常山。岡山藩士。天明元年（二四四一年）歿、年七十四。常山樓文集、常山紀談、左傳解等の著がある。

（二）後拾遺集、中務卿兼明親王の作。

駭く

四　古名將の學問

湯淺元禎（一）

太田持資は上杉の家老なり。鷹野に出でて雨に逢ひ、百姓の家に入りて、「蓑を貸し候へ。」と言ひしに、若き女、物は何とも言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花をくれよといふ事にてはなし。」とて、腹立てて歸りしに、これを聞きし人の、「それは

（二）七重八重花は咲けども山吹の
　みのひとつだになきぞ悲しき

と言へる古歌の心にて、蓑なしと申す事を、花もて知らせ申したるなり。」と申しければ、持資駭きて、「我これ程の事だに知

らで、百姓の娘に劣れる事口惜し。」とて、それより書を讀み、歌に志を寄せにけり。

或時、下總の國へ軍を出しゝに、「山涯の海邊に、山の上より石弓を張りたり。潮たゝひたらば通り難かるべし。いかゞ。」とありし時、をりふし夜半なるに、持資「いざ見て來らん。」とて馬を乘出しけるが、そのまゝ歸り「潮は干たり。」とて、軍を押通しけり。これは

道灌卽智（小堀鞆音筆）

(一)冷泉爲守の作。爲守は連歌の名家。曉月法師といふ。嘉暦三年（一九八八年）歿。

(二)古今集、素性法師の作。

下知

遠(一)くなり近くなるみのはま千鳥
なく音に潮のみちひをぞ知る

と詠める歌あり。それを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。

また退口(のきぐち)に利根川を渡す時、これも夜半にて、暗さは暗し、いづこか淺瀬なるべきと口々に言ひけるに、持資

そこ(二)ひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだ波は立て

と詠める歌あり。波の荒き所を渡せと下知して、難なく淺瀬を渡りけり。

かくの如く、昔より武將は必ず學問に心を寄せ、歌の道を

(錏、錣)

(一)藤原賴通。道長の長子。承保元年（一七三四年）歿、年八十三。

知りけり。

奥州の合戰に、八幡太郎義家、安倍貞任、宗任を攻めて、衣川の城に追詰めし時「きたなくも後を見するかな。もの言はん。」とて、

衣のたては綻びにけり

と言ひかけしに、貞任しころを振向けて、

年を經し絲のみだれのくるしさに

と附けたりければ、義家つがひたる箭をさしはづしけりとぞ。かゝる烈しきをりにかく附けたる事、優に優しき事なるべし。

かくて義家上京の後、宇(一)治の關白を訪うて軍物語しける

を、(一)中納言匡房聞きて、「器量は賢けれども、軍の道は知らず。」とつぶやきけるを、義家の郎等聞きて、「憎き事申され候。」と義家に申しゝかば、義家「子細あるべし。」とて、匡房の中納言、車に乘

義家匡房を訪ふ（谷口香嶠筆）

りける所へ參りて、會釋ありて、やがて弟子になりて學問しけり。後三年の合戰に義家(二)金澤(かねさは)の城を攻めし時、一行(ひとつら)の雁の刈田の面におりんとしけるが、俄に驚き飛亂れけるを、「兵法に『鳥の起るは伏なり。』といふ事あり。定めて伏兵あるべし。」とて、野の三方を取卷きしかば、案の如く三百餘の伏兵ゐたり

(一)大江匡房。學者。天永二年（一七七一年）歿、年七十一。

(二)今秋田縣（羽後國）仙北郡金澤町。

義家雁行を察す

谷口香嶠筆

しを攻破りけり。義家學問に心を寄せずば、などかゝる事を知るべき。

右大將賴朝和歌に心を寄せ、近き年、信玄、謙信兩人とも詩歌を好みけり。(一)蒲生飛驒守氏鄉は、伊勢の松崎(二)十二萬石より、奧州會津百萬石を太閤より拜領し、奧州をきり鎭めたる無雙の猛將なりけれども、極めて和歌を好きけり。氏鄉の家に佐々木の鐙と言へる名高き鐙ありけるを、(三)細川越中守所望しけるに、家來ども「これは名物にて候。別の似よりたる鐙進ぜられよ。」と申しければ、氏鄉

なき名ぞと人にはいひてありぬべし(四)
こゝろのとはばいかゞ答へん

(一)武將。文祿四年(二二五五年)歿、年四十。
(二)今三重縣(伊勢國)飯南郡内の一都邑。天正年中蒲生氏の有となつた。
(三)細川忠興。三齋と號した。
(四)後撰集卷十一、よみ人知らず。

(一)吉野朝の忠臣。名は武時。肥後の人。元弘三年(一九九三年)歿、年四十二。
(二)第九十六代。
(三)櫛田神社。福岡市博多祇園町にある。

と言へる歌の心の恥づかしとて、かの鐙を贈りけりとなり。

元弘の亂に菊池寂阿入道(一)が、後醍醐天皇(二)の敕命にて敵の城に寄せける時、櫛田(三)の宮の前にて馬のすくみたりしに、

　もののふの上箭のかぶらひと筋に
　　おもふこゝろは神ぞしるらん

と詠みて、神殿の大蛇を射て、馬のすくみ直り、既に討死すべき時、故郷へ一首の歌を書きつけて遣しけるに、

　ふるさとにこよひばかりの命とも
　　知らでや人のわれを待つらん

と詠みて、忠義の爲に命を捨てけり。これ等皆文武の人と申すべし。

(一)景高。
(二)兵庫縣(攝津國)武庫郡。神戸市の西。
(三)景季
無下に

大將ばかりにもあらず、名高き士は皆書を讀み學問し、和歌をも好きけり。梶原(一)が一(二)の谷にて、

　もののふのとりつたへたるあづさ弓
　　ひきては人のかへすものかは

と詠み、賴朝の奥州を攻めし時、白河の關を越ゆるに、梶原(三)

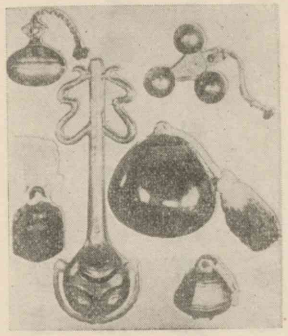
　秋風に草葉のつゆをはらはせて
　　きみがこゆれば關守もなし

と詠みけりとかや。すべて學問して名高き勇士多し。文武は二つならず。詩歌を公家の玩物と思へるは、無下に口惜しき事なり。

——常山紀談——

五　本居翁の遺蹟

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く樂しさ。早稲田は既に刈盡したが、晩稲田は金色に波立つて、豊年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐるまばらな小松原の路を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、「御墓はあそこの山の茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、何時しか山室(一)山に著いた。



鈴屋の遺物

(一)三重縣(伊勢國)飯南郡花岡村にある山。

車を捨てて爪先上りの坂路を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には清らかに珍しい。杉、松、しひなどで小暗い路を稍四五町も上つた所に、淨土宗の寺がある。(一)妙樂寺と言つて、翁には深い關係のある寺である。それから右へ左へと九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上二三十坪くらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本、「本居宣長之奥墓(おくつき)」と題した墓石がある。山室山神社と言ふが、社殿も何もない翁の墓の左手に圓い石があつて、(二)平田篤胤大人の

(一)山室山の麓にある小寺。宣長の菩提寺。

(二)江戸時代の國學者。國學四大人の一。秋田の人。天保十四年(二五〇三年)歿、年六十八。

占定

なきからはいづくの土になりぬとも
魂はおきなのもとに行かなん

と刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられた事はない。しかも數多の門弟子のうちで、ひとり翁の傍に侍つてゐられるのは、さぞかし滿足な事であらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで、住僧に宛てられた手紙は、今尚同寺で珍藏してゐる。

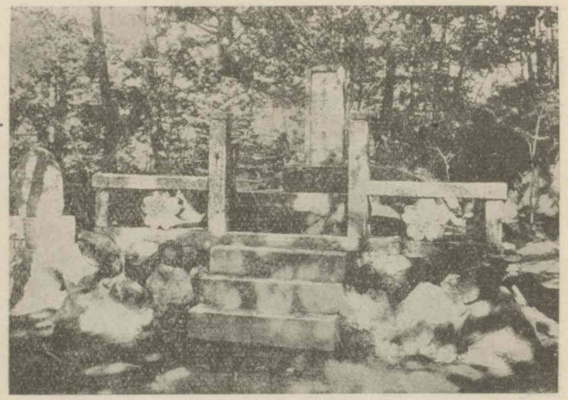
やま室の山に千年のやどしめて
風に知られぬ花をこそ見め

かずまふ

卓絶

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事のない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

百歳の世は隔つれど教へ子に
かずまへませと拜み額づく



本居宣長の墓

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程偉大なものはない。

見はるかす
(一)飯南郡。
(二)hotel.
奥城
(三)松坂市街の西傍にある丘陵。
(四)鈴屋は翁の號。

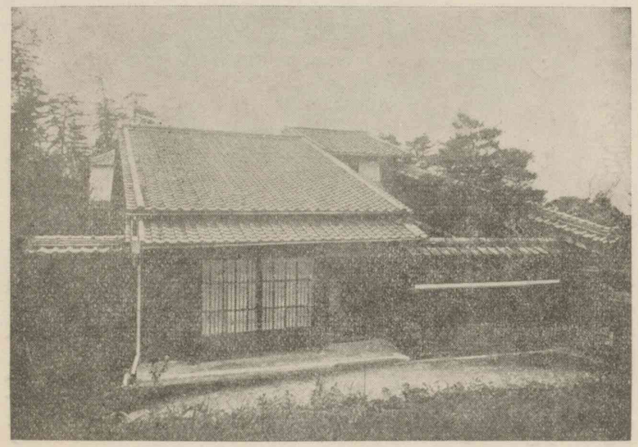
この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張などの崎々、山々、近くは松坂町(一)を眼下に見る。「富士の山も何時もは丁度あのあたりに見える。」と、ホテル(二)の主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此所の眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをり〳〵此所に遊ばれたのである。

松坂へ歸つて城址(三)の公園に行く。此所に鈴屋(四)遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存されてゐる。また新し

稿本
舊態
(一)今の戸主。翁五世の孫。
(竈)

い倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛の物、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。しかし、庭の樹木置石まで、一切舊態を存する樣苦心したといふ事で、本居清造(一)といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、


本居翁の舊宅

鈴屋の翁　坂内青嵐筆

(一)Weimar. ドイツの一都會。

(二)Johann Wolfgang von Göthe. ドイツの詩人。(西紀一七四九―一八三二年)

(三)Johann Christoph Friedrich von Schiller. ゲーテと並び稱せられるドイツの詩人。(西紀一七五九―一八〇四年)

井も、便所も、舊のまゝの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい階子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづゝ六段に繋がれて懸つてゐる。(これは模造品で、本品は陳列庫にある。)これが即ち翁が一切の著書の述作された場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から差しこむ夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家居の樣が、愈翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマール(一)で、ゲーテ(二)やシルレル(三)の舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の狀態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲーテ、シルレルの舊宅を見

豁然　(一)panorama.

返咲

た時には、日本にもかういふ樣に、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、先づこれを翁の舊宅に見る事を得たのは、誠に悦ばしい事である。

この公園は四望豁然、(一)パノラマを見る樣で絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇。松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越した物はない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿、瑞籬が神宮風の樣式であるのは、一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲をしてゐる。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も返咲を見られて、「流石に本居翁の鄕土故、櫻は一年中咲くのだら

う。」と言はれたといふ事である。

さくら木にゐりし百千の巻々ぞ
風に知られぬ花にはありける

六　揚子江の秋

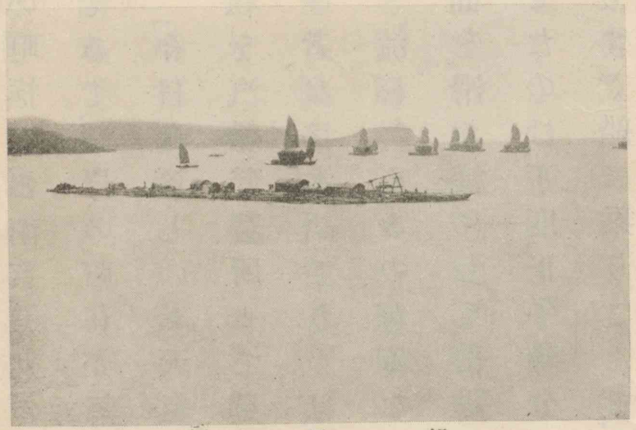
南部修太郎(一)

廣くおほどかなその姿。黄泥の水悠々たるその流。自然の美と詩情との豊かな江蘇平野(二)の蕭條たる秋の眺を擅にしながら、あの揚子江を下つた一日一夜を、私は今も尚感慨深く思ひ浮べる。それは十年(三)前の秋の半ばの事であつたが、杭(四)州に静雅な西湖の勝を探り、水の都蘇州(五)を訪ねて、城内から遠い城外のいくつかの史蹟を巡り、更に南京(六)を訪れて、荒廢

ゐる

(一)小説家。明治二十五年仙臺市に生れた。修道院の秋、過ぎ行く春、返らぬ日等の著がある。
(二)江蘇省にある平野。揚子江の下流。
蕭條
(三)大正十年。
(四)支那浙江省北部の開港場。
(五)支那江蘇省の都會。東洋のベニスといはれる。
(六)江蘇省西部の都會。蘇州の西北約二百キロメートル。

した舊都の寂しい姿に、人事の悲しさはかなさを深く感じさせられた私は、その南京城外の下關(シャクワン)から日清汽船會社の岳陽丸の客となつて、南支那の最後の旅路を、上海(一)へと下つたのであつた。



揚子江

南京に過したその前日は、寥落の都にもふさはしい時雨模様の曇日であつたがそれは一夜のうちに名殘もなく晴上つて、その日は大陸の秋らしく、空は紺青深く澄渡り、稍黄色みを帯びた日の光も、明るく朗かであつた。そ

(一)支那江蘇省滬海道呉松江に臨む貿易港。
寥落

して赤煉瓦の建物や工場の煙突の立つてゐる對岸の浦口(プウカオ)の町、振返る南京城外の獅子山や鍾山の眺もくつきりとしてゐて、湖岸の蘆荻が靜かな風にさや〳〵と戰いでゐた。

「今日は珍しいお天氣です。」下關の宿屋から荷物をさげて、私を汽船發著所まで見送つてくれた若い支那人ボーイは、達者な日本語でさう私に言つた。

流れてゐるのかゐないのか、殆ど分らない樣な靜かな水面を滑る樣にして、岳陽丸が上流の方にその瀟洒な姿を見せたのは、丁度、正午時分であつた。私は埠頭階上の乘船口からすぐ船に乘りこんで、定めの船室に荷物を置いて來ると、また上甲板に引返して、手摺によりながら、棧橋の方を眺め

ひしめき合ふ

てゐた。其所には支那人ばかりの三等船客たちや、荷役を爭ふ苦力たちが、卑しく騷がしくひしめき合つてゐる。そのぶざまさに思はず不快な氣持をそゝられた私は、視線をそらして、反對の甲板の方へ足を向けながら、船の高みからすると、一層廣々と、一層明るく開けて見える江の景色に、うつとりと眺め入つてゐたが、程もなく鈍く尾を引いた汽笛が鳴響くと、船は緩やかな船足で、何時となく埠頭を離れてゐた。

川の船路とは言へ、船は白塗の姿麗しい三千餘トンの岳陽丸である。そしてその大船を輕く波上に浮べて、黄に濁る水靜かに流れ行く揚子江。川幅は時に五六町に擴がり、時に二三町に迫るが、曲折も大きくなだらかに、船はその間を機

(一)poplar.

闘の音も微に、小搖ぎもせずに進み下つて行くのである。流石に秋である。江岸に美しく戰ぐ蘆荻も、所々うつすりと黄ばんでゐる。草を食む水牛の群。すく／＼と群がり立つポプラ(一)の木。垂葉の緑深い楊柳の蔭に憩ふ牧童の姿。それ等は何れも江岸の好ましい眺であるが、岸近く立つ丘陵の頂に時々見える苔むした、朽ち崩れた樣な古塔の姿は、何れもその昔榮えては、また何時となく亡びた帝王たちの豪華の夢を物語る物であらう。杭州

虎丘全景

(一)江蘇省の河港。

の雷峯塔、蘇州の北寺の塔や虎丘の塔、上海郊外の龍華寺の塔などと、江蘇平野一帶には、とり／＼の傳説をもつ古塔の姿を、いくつとなく見る事が出來るが、殊に江岸に眺められるそれ等は、今も昔も變りなく流れて行く長江の水に對して、人事のはかなさ寂しさを感じさせずにはおかない。

　五十哩程を四五時間に下つて、船が南岸の鎭江(一)(チンキャン)に投錨したのはもう黄昏の頃で、江を流れる靜かな夕風も、何となく肌

金山寺　(山内信一筆)

に冷やかだつた。私たち日本人の一等船客四五人づれは、船長の好意で船をおりて、鎭江の町を小一時間程散歩して、すつかり日の暮れおちた頃、また船に歸つて來た。西の方の空には三日月がかゝり、きらめく星影も美しく、江岸に沿うてぽつ〳〵と明りのついた鎭江の埠頭は、いかにも水郷らしい、しつとりした眺であつた。

「あれが名高い(一)金山寺で、ずつと向ふの山の頂に見えるのが甘露寺です。」船長はうつすりとした夕靄の彼方を指さしながら、さう說明した。

船はまた何時となく埠頭を離れて、(二)蕉山島の影を左にしながら、靜かな波間を滑る樣に進んでゐた。私は甲板の手摺

(一)江蘇省丹徒縣金山の上にある。今は江天寺と言ふ。

(二)鎭江の東北。揚子江中にある。

によつて、思はずも異鄕の旅人らしい感傷をさそはれながら、一人江岸の夜景に寂しい視線を投げてゐた。颯々たる冷い夜風。柔かな機關の響。靜かな船の蹴波の音。江の幅は次第に廣くなつて、岸邊の蘆荻も闇の中に吸はれてしまひ、三日月の影も何時となく遠くの山の端に隱れて、空高き星の光のみひとりさえて、夜は漸く更けて行く。すべては何といふ感慨深い情景であつたらうか。

思へば有史以來三千餘年、或時は榮華に醉ふ帝王宮嬪たちの豪奢な宴の畫舫を浮べ、或時は醉詩人をして秋の月明を樂しませ、或時は傷ましい敗將の淚をさそひ、溯る人、下る人をして、數奇多樣な感慨を催させたに違ない長江の水。人

蹴波

宮嬪

畫舫

數奇

（一）詩人。明治二十八年金澤市に生れた。唱名、花巡禮、武藏野、東京市等の著がある。

生のあらゆる有爲轉變もよそに流れて盡きず、盡きず流れて三千二百餘哩、今も尚黄泥の水悠々と、その偉大な姿を私の眼前に蜿々と延べてゐる。私は暫く視線を伏せて、暗い水の面に眺め入つてゐたが、自然の悠久に對して、人生の短さ、はかなさを今更の樣に感じさせられて、思はず瞼の潤むを禁じ得なかつたのであつた。

七　夕もやの野

中西悟堂（一）

野にはもう夕靄が流れ始めた。
あちこちの枯木立の梢は夕日の殘光に染められ、
靜けさと平和とに領せられた麥畑には、
默つて農夫が働いてゐる。
その敬虔な勞働の姿よ。
とき〴〵くはが白く光るが、
靄はもう彼等を包みながら、
青麥の上を生き物のやうにはひまはる。

畑の路を
ざるをかゝへた娘が家路の方へ歸つて行く。
ざるに盛られた野菜の新鮮な綠、
そして頰被の下に見える娘の顏の單純な健康な笑よ。
娘は畑をぬけて、
木立の路を夕餉の煙吐く垣根の方へ
はだしのまゝ急いで行く。

（旅）

(一)英學者、教育家。奈良縣立五條中學校長。鹿兒島縣の人。

神の言葉に充ちた平和な野よ。
こゝには愛とゆるしの外の何物もない。
地平線には墨繪のやうな富士が風に吹かれてゐて、
その上にゆふべの星が出現した。
農夫たちがそれにむかつて一日の恙ない勞働を感謝し、
あすの幸福を祈るところの慈悲ある星が出現した。

八　鷹が渡る

野村傳四(一)

「鷹が渡る。」と言ふ鋭い聲が、秋の空氣を突拔けて、村の一隅から起る。同じ聲が他の一隅にも起る。稻の穗波の黄ばみ渡つた田の中からも起る。椿や竹の林に隱れた家からも起る。

朔北

時は愁人の膚そゞろに寒い頃、渡鷹の一群が南を指して、秋の空を渡り行く偉觀は、余が故郷なる大隅の南端を除いては、日本國中何れの地にも見る事は出來ない。

嘗て余は黑潮の流を下つた事がある。深碧の潮の流は直徑十數町に亙る一大圏を劃して、盛んに渦を卷き、眞白な泡を表面に漲らして、汽船をも卷きこみ、岩をも押流す樣な勢で流れて行く。雪寒き朔北の天地から、やしの葉青く風薫しい南洋の冬に渡つて行く一種の鷹は、正にこの潮流と同じく、大空を廻轉しつゝ進んで行く。そしてまた同じく偉觀である。

音を發すると間もなく空に吸ひこまれる花火の烟程の

墨痕

（隼）

雲もない秋の空は、日本晴に晴れて、天上には祕密な隱家もない時、南を指して雙翼を伸したこの避寒客の數は、十萬か、五十萬か、はた百萬か知らぬ。初めひよくらゐに見えた一群の鳥は、高く舞上る爲に、障害物もない大空に、直徑數町もある一大圈を劃し始める。一隊が一廻轉したかせぬかといふ頃になると、ひよくらゐに見えた形が、雀くらゐに小さくなる。すると、一隊は一先づ南方へ流れ出す。夢の樣にすうつと飛んでは翼をせはしく使ふ樣ははやぶさに似てゐる。暫くするとまた廻轉し始める。雀程の影は更に遠ざかつて、糠蟲程になる。更にまた流れ出す。かくして廻轉を繰返し行く間に、一個々々の影は、靑絹の上に落した墨痕の樣に見える。そ

隊伍肅々

神韻縹渺

して一隊が南へ去れば、後の一隊がその後を襲ふ。後の一隊が遠ざかれば、またその後の一隊がこれに續く。しかもこの

雄姿（廣瀨東畝筆）

大集團に一羽の外れるものもなく、聲を立てるものもない。恰も南より北に奔る天の川が、あらゆる星の影を掠めて、晝の間を逆に流れるが如くに見える。百萬の師が隊伍肅々として、萬里遠征の途に上る樣をも想像させる。神韻縹渺たる詩集の一卷を繙く樣な心持にもなる。「鷹が渡る。」と言ふ聲が、この時村のどこかに響き渡ると、直

首途
（籾）
けゞんな

ちに全村の注意を引く。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して、空を仰ぎ、手を拍ち、ぢだんだ踏んで、「鷹よ、〳〵。」と、小さい喉も張裂けるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝してやる。老人はもみを一杯に干した庭に滑り下りて、見えぬ眼を擦りつゝ青空を見上げて、過去幾十年の秋の記憶を繰返す。黄ばみ渡つた畑に立つ夫婦は、しばしくはの手を休め、頭の手拭を取つて顔の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ、互に相顧て、更に笑顔に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どん〳〵南へ去る。見送人の心は様々であらう。

裏の畑に穗を摘む雛は、けゞんな顔を上げ、長く伸した首を傾けて、空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いた様に

蠢々
殿軍
蜿蜒
(一)鹿兒島縣（大隅國）肝屬郡、九州の南端。
(二)Philippine.（比律賓）臺灣の南方にある群島。

騒いでゐた群雀は、ちゆ〳〵といふ一羽の合圖にぴたりと鳴りを靜め、ひれ伏して、笹蔭から天上の行列を送る。茅葺の屋根に秋の日を浴びて睦ましく遊んでゐた家鳩の夫婦は、遽しく我が巣に引籠つて、空を仰ぎ見る事すら敢へてしない。渡鷹の大奇隊は蠢々（しゆん〳〵）たる地上の影を顧もせず、悠々として南へ去る。かくて前後一二里に亙る大軍は、僅少な殿軍を除けば、時餘にして全く通過し、それより二三里を距てた地に蜿蜒として南方の空を壓する。五千尺以上の山脈を眼下に見、進んでは佐多岬(一)の燈臺を兒戲と觀て、洋々たる大洋を、昨日も今日ももと南へ越えて行くのであらう。目的とする所は臺灣か、フィリピン(二)か、但しは南洋の島々か。

弱冠
山村水郭
(一)小說家。蘆花と號した。熊本縣の人。昭和二年歿。年六十。自然と人生、思ひ出の記、不如歸、みゝずのたはこと等の著があり、蘆花全集二十巻に收められてゐる。
永遠を思ふ

「鷹が渡る。」余は弱冠にして家を出で、故郷の秋に背く事茲に十幾年である。しかし、身は何所の境にあつても、この一語を想ひ起せば、直ちに故郷の遠山近嶽、山村水郭を背景として、渡鷹の大軍が一大パノラマの如く眼前に浮ぶ。眼を閉ぢても去らぬ。それと共に、幼時の秋の記憶は、余の腦裏に黒潮の如く渦巻き、渡鷹の如く廻轉する。

九　我が家の富

德富健次郎(一)

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰か言ふ「狹くして且陋なり。」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

宇宙
須臾

神の月日は此所にも照れば、四季も來り、風、雨、雪、霰かはるがはる至りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

德富健次郎

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散す。

隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を著く。子細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

（山梔、梔子）

滾々

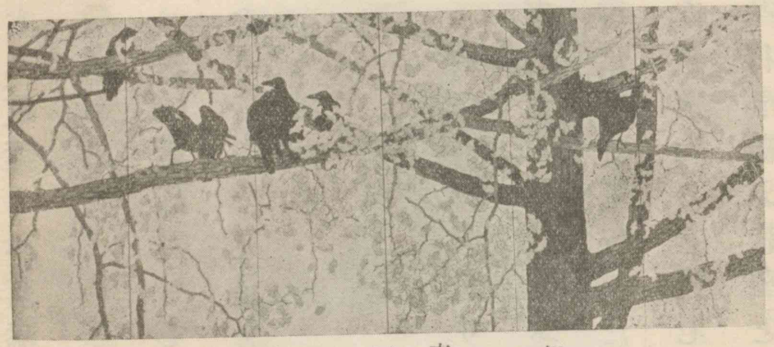
庭隅に一株のくちなしあり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の梧あり。碧幹亭々として少しのゆがみなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる八手とは葉闘うして、我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つく／＼ぼふしの聲に世は何時しか秋に入りて、山茶花咲き、三尺許の楓も紅に燃えいで、唯一株、前の家主の植ゑのこしたる黄菊も咲出づ。名苑の花美しと言ふとも、秋のあは

(一)梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶暦七年(二四一七年)歿、年八十六。
(二)蛻巖の九月九日の詩。

翩々



銀杏（山田耕雲筆）

れ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖(一)の翁ならば、(二)「獨り憐む細菊荊扉に近きを。」とや吟ぜん。恥づらくは「海内の文章布衣に落つ。」と唱すべき身にあらざる事を。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩々として飜り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、所として落葉ならざるは

(一)江戸時代の醫師、國學者。本名は宮川春暉。伊勢の人。文化二年(二四六五年)歿、年五十三。北窓瑣談、東西遊記等の著がある。

野服

方頂巾

なく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人は言ふなる錦を、我は庭に敷詰めぬ。

木の葉落盡しては流石に寂しげなれど、日影、月影愈、多くなりて、空を見、星を見るに障少きは嬉し。

一〇 篤實

橘南谿(一)

余が諸國を巡りて、備後の國を通りし時、百姓と見ゆる年老いたる男二人、ふと道づれになりぬ。山の名、里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、その一人、我が野服を著し、方頂巾を戴きたるを怪しみて、「いかなる人にて、いづくよりいづくへ行き給ふにか。」と問ふ。「我は都方の醫者なるが、醫術修業の

いぶせし

爲に諸國を遊歷するなり。」と答ふれば、「さてもたのもしき御人や。我等が住む里は向ふの山の奥なるが、親しき家の女房

橘南谿像

に奇妙なる難病ありて、はや二年(ふたとせ)になれるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせし。その家にても色々と醫療盡さゞる事はなけれど、露ばかりの驗(しるし)もなく、今ははや危く見え候。かゝる山深き片田舍なれば、名高き醫師も候はず。あはれ、都近くもあるならばなど、親類の者どもは歎き居り候。今日は圖らずも巡り合ひて、京都の御醫と承り候へば、親類どもが常々の詞も思ひ出されて、あはれ

（一）今廣島縣（備後國）尾道市。

にも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はらばや。」と、誠の心言葉に出でて、また餘儀もなく見えたりしかば、余も「この道修業の事なれば、いと易き事なり。」とうけがひて、かの者どものしりへに從ひて、尾道（一）の二三里ばかり此方より、右の方に分入りぬ。

鹿、猨の通ふ如き細路を、谷に下り峯に上りて、行けども行けども程遠きに、日影もやゝ傾きて、腹饑ゑ、足疲れたれば、僕は腹立ちて、「程も知れぬいたづら事。」とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やう／＼に到り著きぬ。とある山あひのいと寂しき里にて、本郷といふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を

六兵衞といふ。案内の者しか／＼の由を言へば、家内皆驚き悦ぶ。病者は「去年の冬より、難治の病に罹り候ひしが、次第に重りて、果ては腹裂くる心地して、苦しみ譬へん方なく、日々月々に病つのり、春の頃よりは一入にて、横に臥せば下腹一入裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪難し。それ故、晝夜唯こたつの櫓に兩手をつかへ、立ちながらうつむきてをる時のみ少し心安らかなる樣なれば、春以來はかた時も坐せず、臥さず、唯晝夜食ふにも、眠るにも、この通りなり。その苦しみなか／＼申すも愚かに候。近き頃は殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をとのみ待居り候。命の事は助かるべくも思ひ候はねど、都の人と承れば、ゆかし

腫氣

くこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給ひて、横に臥して安らかに永眠するを得しめ給はば、上もなき御恵。」と涙を流せる樣、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちてうつむきをれば、足は柱の如く腫氣ありて、顔もまた眼ぶち腫れ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり〱腹はり來る時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體は誠にかくの如く危ければ、その脈に見所ありければ、急ぎ藥を與へ、尙藥湯をもて腰より下を漬し、種々の療術を用ひしかば、やがて通利出で來て、始めて横樣に臥す事を得たり。尙しな〲の療治を加へ、この以後に用ふべき藥方を委しく書きしるし、用ひ方などまでも細かに傳へ置

(一)廣島縣(備後國)御調郡。淺野氏の舊城下。

粗忽

(二)今京都市下京區。

きて、その家を辭して、數里の深山を分出でて、三原(一)の城下に著きぬ。

三原にてこの物語をせしに、「さても危き事なりき。御心に誠ありたればこそ佛神の助もありて、誠の事に逢ひ給ふならめ。かくの如き事は、多くは盜賊の詐る事にて、旅する人を人なき深山に連行き、刺殺して金銀衣類を奪ふ事珍しからず。この後は必ず粗忽のふるまひし給ふべからず。」と言ひけるにぞ、始めて心づきて、恙なかりし事を喜びき。

それより諸國を巡り、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條(二)の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前、九州へ赴き給ひし御醫者はこなたなりや。」と問ふ。「いかなる用ぞ。」と聞け

ば、「備後の國より六兵衛といふ百姓一人上り來り候ひて、『下に市の字の附きたる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去々年しかぐの事にて高恩を受けたれば、御禮の爲に來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に市の字ありしを見覺えたり。』と申す。手がゝりもなき尋ね樣かなと存じ候へども、その志殊勝にも候へば、先づ表札を見巡りて、市の字を見當て候へば、お尋ね申すなり。」と言ふにぞ、「その事あり。」と言へば、乃ち歸りぬ。その次の日、かの六兵衛、旅宿のあるじと同道し來りて、備後疊を自ら持ちて禮物とし、「さても過ぎし年は不思議の御緣にて、妻なる者御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりして驗

を得、仰せ置かれし日限の如くに、さしもの難病も平癒して、再び常體(つねてい)の人となり候ひぬ。近所の者の行きあひより始りて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村にて評判致してこそ候へ。京を尋ねたりとも、逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩に、ひと言の御禮も申さゞる心のうちも安からず、若し逢ひ奉る事かなはずば、東寺(一)にても參り候うて、弘法大師樣へ御禮申して歸るべしと存じ極めて參り候ひしなり。先づは尋ね當てて、日頃の本望を遂げ候。」とて、眞實顏色に現れたり。余も嬉しくて、暫しもてなし慰めて、歸しやりぬ。都近くの者ならば、百里に餘れる海山を、いかではるぐ尋ね來べき。邊土の民の篤實

(一)本名八幡山敎王護國寺。今京都市下京區。もと眞言宗の總本山、今眞言宗東寺派の大本山。弘仁十四年（一四八三年）空海は敕旨によつて此所の長者となつた。

(一)大和郡山藩の重臣。名は里恭。寶曆八年(二四一八年)歿、年五十三。雲萍雜志の著がある。

土偶人

なる事、感ずるにも尙餘りあり。

——西遊記——

一一　土器賣る翁

柳澤淇園(一)

伏見より年七十歳許なる老翁、土器のたぐひを擔ひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に來りて食事をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁に言ひけるは、「御身の擔ひたる物は、その價いか程ばかりの品にか。」と問へば、翁答へて、「銀十五六匁程の荷なるべし。」と言ふ。また問ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかゞする。」と言へば、「それこそ過なれば、さる事なしとは言ふべからず。さある時はその

無心

その許たち

(一)心學者。名は亨。京都の人。失明後、諸國を遊歴して道話を講じた。天保十年(二四九九年)歿、年五十七。

日ざし　日のさしぐあひ。

八つさがり　午後二時過。ひどく腹のへつたのをいふ。

事をありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」と言ふ。また問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかゞする。」と詰り言へば、「いかに問屋なりとて、數度の無心も言難ければ、そのをりこそその許たちの如く、奉公なりともいたすより外にせんかたなし。」と言へり。

——雲萍雜志——

自修文

心の洗濯

柴田鳩翁(一)

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうした事やら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見ればはや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これは

釜の中に蜘蛛の巣がはる　たく米がなくなる。
屋敷町　武家屋敷の連なつてゐる町。
知行　生活のもとで。
月代　もと男が額から頭の中央にかけて髪を剃つたこと。
鏡立　昔、鏡を見る爲に立てかけたもの。

つまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、何時の間にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根、々々。」と賣歩いた。

或御屋敷の表長屋の窓の內から「これ大根屋。」と呼ぶ。やれ嬉しや、先づ知行にありついたと、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の內から呼んだのぢや。其所で大根屋が、表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の內、門口には何がしと表札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、緣先の障子をあけ、旦那殿が今月代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結ひながら「その大根はいくらぢや。」と言ふ。「百に三把で御座ります。」と言へば「それは高い。二十四文づゝにして置け。」と言はれる。賣りたきは山々なれ

泣步く　困りきつて步く。
かぶり頭。
し樣も樣もなく　どうともしかたなく。

ども、現在損のたつ事なれば「どうぞ三把にお買ひなされて下され。今朝から江戶中を泣步いて、まだ一把も賣りません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません。」と言ふ。かのお侍かぶり振り「それでも高い。まからずば、先づよしにせう。」と言捨てて、緣先の障子をはたと締められた。

大根屋も色々と言うて見ても、かのお侍が相手にならぬ。其所でし樣も樣もなく「はてつまらぬ。もう日の入には間もなし、何でも四五百の錢を持つて歸らぬと、親子五人が明日の命が繫がれぬ。何としたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら見廻すと、緣先の金だらひが、ふつと目に附いた。障子は締めてある。あたりに見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下にそつと隱す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立所に狹うなつて、五尺の身體を暫くも置くべき所がない。

ぬからぬ顏　油斷のない顏つき。
われは　汝は。
きつう　ひどく。

そこで荷を擔いで、門口を出ようとすると、障子の内から「これ大根屋。」と呼掛けられる。ぬからぬ顏で、「まかりません。」と言ふと、「いやいや、直はねぎるまい。その大根買はう。」と言ひ樣、障子をさらりとあけられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把程いりまする。はした賣は出來ません。」と言ふ。「いや〳〵、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この緣先に並べてくれい。」と言はれる。さあ大根屋も絕體絕命、障子の締つてあるうちなら、金だらひの出し樣もあらうに、今更金だらひが出されもせず。と言うて、賣るまいとも言はれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろ〳〵としてゐると、かのお侍が、大根屋の顏をきつと見て、「われはきつううろたへてゐるぞよ。先づ金だらひから出して、大根の數を數へて

眞平　ひとへに。ひらに。
（詫）
氣立　きまへ。性質。
氣色　やうす。

見よ。」と言はれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わな〳〵震へながら、かの金だらひを恥づかしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那樣眞平御免なされて下さりませ。何を隱しませう。先刻も申しまする通り、今朝からまだ一文の商も致しませず、このまゝ歸りますると、明日親子五人が食べます事がなりません。悲しい貧のぬすみ根性、面目次第も御座りません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人の命をお助けなされて下さりませ。」と、色青ざめて、土にあたまをすりつけて、わび言をする。

かのお侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見せず、「いやいや、そのわび言には及ばぬ。先づ大根の數をよんで見よ。」と言はれる。こは〳〵ながら、大根を緣に積上げた所が二十三把。かのお侍、大根賣を呼んで、「さあ、その方が言ふ通りに、二十三把七百六

十四文、ついでに金だらひを添へて遣す。貧のぬすみとは言ひながら、われが根性は餘程汚れてあると見える。この金だらひは顔や手足を洗ふ道具なれど、心の洗ひ様もありさうなものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ。」と言捨て、障子を締めて内へはいる。かの大根屋もこれから本心になつて夜晝働き、三年目には遂に相應な八百屋になつたといふ事であります。

——鳩翁道話(一)——

(一)鳩翁の講話を集めた書。九卷。

(二)佛文學者。早稲田大學教授。明治十三年松本市に生れた。佛蘭西印象記、南歐の空、自然讀本、吉江喬松詩集等の著がある。

一二　伐木

吉江喬松(二)

靜かな冬の朝の日の光は、こんもり茂つてゐる椿の藪影を濃く地上に印して、その葉影のまはりの地上の霜は、きらきら輝きながら、じつ〳〵と微な音をたてて消えて行く。

硝子窓越しに見る冬の空は淡靑にさえて、迷ひ雲の一片すら見られない。郊外の村を繞らしてゐる杉の森の中に、細い煙突が一條見えて、薄白い煙が森の頂に靡きかゝつてゐる。十二月の初旬からかけて一月中旬まで、「冬」はその最も「靜寂な姿」を示してゐる時だ。渡鳥の鳴聲一つ、枯木の小枝を搖がす風さへ聞えて來ない。夏の夜に耳にする若やいだ人々の話聲は、どこへ消えたのやら、すべてが冷い空氣の中に、じつと凍てつきでもした樣に、靜肅の極みを見せてゐる。

と、どこからか、どさんと物を投出した樣な、賴りない物音が響いて來る。その物音は強く空氣を震ひ動かすのでもない。いかにも力なげに、疲れた身體をクッション(一)の上にでも投げ

(一)Cushion.

る樣な、投げたならばもう立上る勇氣もなささうな物の響だ。

じつと耳を澄してゐると今度は短いが、稍手ごたへのある澄んだ響が傳はつて來る。がつさ、〳〵と木の枝の搖れるのが聞える。――地續のくぬぎ林を伐つてゐるのだ。

少し間をおいて、またどさつと倒れる音がする。がつさ、がつさと枯葉の附いたまゝの枝を拂ふ音がする。二三人の人聲さへ聞えて來る。もの寂しい悲しい思が微に胸をめぐる。

郊外の林々を伐倒し〳〵して、人は家を建てる。それも若葉の瑞々しい初夏の森には手もつけ得ずして、枯木の樣にじつと動かずに立つてゐる冬の森へ來て、人々はこは〴〵な

がらその冷い幹へ斧を打ちこんでゐるのだ。

「若木を伐るのは罪だ。」と故老は言傳へてゐる。郊外の森を伐拂ふには、きまつた樣に冬枯の時期にしてゐる。杉や、くぬぎや、けやきの樹が、皮を剝がれたり、枝を伐拂はれたり、幹を伐刻まれたりして、路傍に投出されてゐる。その樹肌に冷く霜が置き、むごたらしく日が照りつけ、ざら〳〵した砂塵が傷ましく肌目にしみこんでゐる。

山國の寒い空氣に高鳴りを傳へて、溪間に伐倒される松の樹の音には、鋭く地殼を裂破つて、地中まで深く突きとほして行く樣な凄い響が籠つてゐる。伐倒した者の立つてゐる地面が、同じ凄い唸を立てて、一木の倒れた後に、長く〳〵

角ぐむ

その響を藏してゐる樣だ。夜陰になつてから、何とも知れず、地を破り山を突裂いて高く鳴り渡る物の響は、この伐木の恨めしい物音が、地中から高く反射するのかも知れない。かあんと響いて高く斧を彈き返す凍つた樹幹は、しばし刃金の鋭さをも寄せつけずにゐるが、幾度も打ちこむ斧の刃は、遂にその樹の胴へ深く食入つて、軋む樣にして容易くは拔取れない。刃金と樹幹との烈しい爭鬪は、冬の寒國でよく見掛ける現象である。

抵抗するだけの力もなく、不意を襲はれて伐倒される郊外のくぬぎ林の哀さ。高鳴りを立てるだけの力さへない。若芽の角ぐむのを待つて落ちるべき運命を持つてゐるくぬ

横なぐり
(颪)

ぎの葉は、唯がつさ〳〵と、鋸の根元に食入つて行く毎に、斧の烈しく打ちこまれる度に、微な身慄をしてゐるに過ぎない。枯草の上へ投出された幹の、病者が床の上へ崩れて倒れる樣なはかない響、その中に武藏野の横なぐりの秩父おろしに抵抗したあの力強い力が籠つてゐたらうか。

人家と人家とが周圍に立圍んで、僅かの空地に互に身を寄せ合ふ樣にして立つてゐた小さなくぬぎ林は、今年の冬までの命で伐拂はれてしまふ。切株の上に人の家が建ち、切株の上に道路がつけられて、暗夜にその上を通る人の足に、他とは異なつた不思議な感じを下駄の歯に響かせても、それを感ずるだけの神經をもつた者も、もつてゐない者もあ

る。かく伐拂はれ、征服されて行く「森林の復讐」は、何時いかなる形を採つて、人間の上に及んで來る事であらう。
伐木の賴りない力ない響は、終日冬の郊外に響いてゐる。

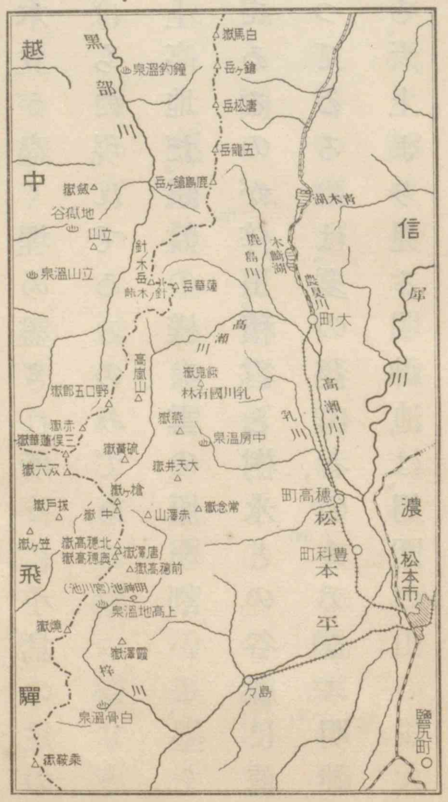
——自然讀本——

一三 雪の日本アルプスを廻りて

飛行機上から觀た嚴冬の日本アルプス(一)の大觀は、まだ世に紹介されてゐない。それは實に日本の山岳界に於ける最も壯嚴な光景の一つである。我等は舊冬同地方に於ける好調子の天候を待望んでゐたが、十二月二十九日朝(二)、アルプス一帶快晴の報を得て、ドルニエ・メルクール機(三)に乘じ、惡氣流

(一)(Alps) 飛驒山脈、木曾山脈、赤石山脈を包含する一大山系。これを各北、中央、南アルプスと稱する。
(二)昭和五年。
(三)Dornier Merkur. ドイツのドルニエ會社製のメルクール型飛行機。

と闘ひつゝ、非常な冒險の下に三千餘メートルの巨峯連立する眞上の空を縱橫に飛び、更に信越一帶の銀盤上に於けるスキー(一)場地一帶を訪問した。



アルプスの北尾根にさしかゝつて望觀すると、北(二)、奧、前の三穗高は、何れも巨大な怪物が絶えず白雪を噛んでは吐散してゐる樣なもの凄い形相。山頂ではその雪が烈風に飛ばされ、山腹では吹雪となつて舞つてゐる。穗高の峯々の雪は(三)ミルク

(一)ski.
尾根
(二)長野、岐阜兩縣の境に聳える連峯。三穗高何れも三〇〇〇メートル前後。
形相
(三)milk.

(一) Christmas-tree.
(二) 長野縣の西部、日本北アルプス中にある溪谷で溫泉地。附近に穗高、霞澤嶽等が聳え、風光雄大、塵外の絶域である。
(三) 北アルプス中の雄峯槍、穗高に發し、雪解水を集めて上高地を貫流し犀川に注ぐ。
(四) oasis.
(五) 宮川池ともいふ。上高地溫泉の東。幽寂の氣に滿ちてゐる。

でも頭からぶつかけた樣に、幾條かの流となつてゐる。

穗高の上空から俯瞰するもの凄い雪の山と谷の世界。水晶の樣な絶壁。綿を一面に被せたクリスマス・ツリー(一)の森林。積雪の多い所は木立が盡く埋め盡され、所々に小鳥の足の樣に、梢の枝がまばらに現れてゐるのみである。

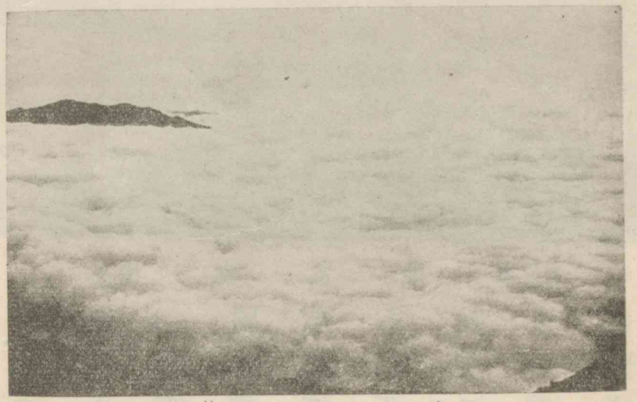
前穗高の麓は上高地(二)だ。銀盤の樣な雪の原を割いて、墨を引いた樣に流れてゐるのが梓川(三)。積雪と樹氷との谷底に眞個小さな鏡となつてゐるのは、夏の登山者のオアシス(四)明神池(五)の冬眠姿である。天上より見る明神池は、周圍の山の雄大さに引きかへて、箱庭の池よりも小さいが、銀の鎧を著た巨峯に護られた山の小さなお姫樣の樣にかはいらしい。をり

槍穗高連峯

から上空は烈風で、飛行機は搖れに搖れたが、この上高地の谷底だけは、いかにも神代の樣な靜けさである。

我等の機が冬の高空に特有な酷寒の烈風と鬪ひつゝ、三千六百メートルの高度を取つて、穗高の上を幾度か旋回してゐるうちに、西の方から送られて來た綿の樣な雲は、見る〳〵全アルプスの高空を覆うてしまつた。連なる山と雲との間が三百メートルもあらうか、機はこの中を飛んでゐるのだ。……危險この上もない。

四千メートルの高空で雲海の雄大美を存分眺めた後、雲層を潜つて見れば依然穂高の上だ。機は北穂高の尾根とすれ／＼に進む。北穂高は穂高三峯の中でも一番美しく雪に粧はれてゐる。一面雪に覆はれてゐると言ふのではなくて、白い雪と黒い岩とが綺麗な縞を織成してゐるのだ。その美しい尾根が唐澤(一)、奥穂高へと、らくだの背の様な形をして續いてゐる。尖端を斷去られた樣な山頂にも、水晶盤の如く雪が



雲海

(一)穂高嶽の一峯。海拔三一〇三メートル。

氷結してゐる。二つの大きな谷と小さな幾つかの山とを隔てて遙か向ふには拔戸嶽(一)、笠ケ嶽(二)の大きな峯が、銀屏風でも立てた樣に、雪の美を競つて立つてゐる。

槍(三)頂上には時々雲が去來し、風は猛烈な渦を巻いて間斷なく吹いてゐる。あらゆる自然の猛威を以て防いでゐるのだ。穂高の上で大きく旋回した機は、幾度試みても、終に槍の頂上には行けない。機は何時の間にか燕(四)(つばくろ)嶽の上に來た。燕は美しく輝く雪に包まれ、鮮かな山の線が走つてゐる。展開するアルプス大小高峯の壯觀、高嵐(五)も、野口五郎嶽(六)も、硫黃嶽(七)、赤(八)嶽も眼下だ。そして數々の山に取圍まれて巍然とそゝり立つアルプスの王者槍の偉容は流石だ。

(一)槍ヶ嶽の西方。海拔二八一三メートル。
(二)北穂高嶽の西方。海拔二八九八メートル。
(三)穂高の北方に連なる。その頂は槍の穂の様になつてゐる。海拔三一八〇メートル。
(四)槍ヶ嶽の東北方。海拔二七六三メートル。
(五)高嵐山。野口五郎嶽の東方。海拔二一五一メートル。
(六)硫黃を隔てて槍ヶ嶽の北方に聳える。海拔二九二四メートル。
(七)(八)共に槍ヶ嶽の北に連なる。硫黃嶽は海拔二五五四メートル、赤嶽は二四二四メートル。

(一)槍ヶ嶽と北穗高嶽との間にある。
(二)信濃鐵道有明驛の西北一八キロメートル。燕嶽と有明山との相對峙する中間にある。
(三)燕嶽の北に連なる。海拔二六四七メートル。
(四)餓鬼嶽の東南山麓一帶の地。
(五)餓鬼嶽の北方なる蓮華岳と針ノ木岳との中間鞍部で、その雪溪は嶮を以て名高い。
(六)cream.

槍の山肌は引割いた様な嶮崖。突立つた山頂は烈風に吹きさらされて、雪らしい雪を置いてゐない。槍の保護を受けてゐる様な中嶽前(一)の澤は雪溜りとなつて、あの深い谷を淺くしてしまつてゐる。この附近には殺生、坊主、大槍など、登山家の命を託す山小屋があるのだが、一面の雪で空からは見えない。

槍、穗高を後に北へ進むと燕の麓。雪の谷底には中房(二)溫泉が靜かに眠つてゐる。間もなく眼下に廣がつたのは餓鬼(三)嶽、北澤、中澤、南澤などで、すつかり雪に覆はれた乳川(四)國有林だ。あの有名な針ノ(五)木峠も、純白(六)クリームの様な雪に包まれてゐる。

(一)日本北アルプスの最東部の連嶺、いはゆる後立山山脈の盟主。海拔二八三〇メートル。
(二)(三)鹿島鎗ヶ岳の北に連なる。唐松は海拔二六九六メートル、五龍は二八一四メートル。
(四)(五)後立山山脈南端の雄峯。針ノ木岳は海拔二八二一メートル、蓮華岳は二七九九メートル。
雲煙模糊
(六)後立山山脈の東麓。
(七)木崎湖の北に横たはる。
(八)多くの湖水を集めて犀川の支流高瀬川に注ぐ。

綿の様な白雲が浮ぶ下に、美しい鹿(一)島鎗ヶ岳の姿を發見する。唐(二)松、五(三)龍の二岳と重なる様に並んで、銀雪の山肌に黑く殘つた幾條となき谷の流、峯の岩影等は、全く一つの偉大な模樣圖案である。雲煙模糊の中に銀峯の見え隱れする空中からの美觀は、神韻縹緲といふ外、現す言葉がない。

鹿島鎗、針(四)ノ木、蓮(五)華、――氷を立てた様な雪山に圍まれた谷底に、木(六)崎湖と靑(七)木湖とが一本の絲で繫いだ様に並んでゐる。白銀きらびやかな世界に、これはまた何と淡黑く靜かな事だ。空から見る木崎湖は細長いへうたんの樣で、周圍の小さな峯々が湖をのぞきこんでゐる。雪化粧姿を鏡に映してゐる恰好だ。木崎湖から流れる農具(八)川は、雪の中にのたう

つ大蛇の樣に黑く走つて、松本平(一)へと出る。

—東京朝日新聞—

(一)長野縣の中部、松本市附近の平地。

一四　日章旗と水戸烈公

木宮泰彦(二)

(二)歷史家。靜岡高等學校教授。明治二十年靜岡縣に生れた。面白い日本歷史の話、日本支那交通史、參考日本通史等の著がある。

およそ國旗は國家の標號であるから、その國の歷史を語り、その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示す物でなくてはならぬ。世界何れの國と雖も、國旗の制のない國はないが、我が日章旗の樣に鮮明で純一、端正で雄大なのはない。

曲折

しかし、我が日章旗が國旗として制定されるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるの

は、水戸烈公(一)の功績である。

(一)德川齊昭。水戸の藩主。萬延元年(二五二〇年)歿、年六十一。

嘉永六年六月米艦四隻が浦賀(二)に來て交通を求めた時、我が國の上下驚愕してなす所を知らず、幕府は水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船建造の禁を解いた。一度大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造され、中には蒸氣船さへ造る者もあつた。隨つて我が國に於ても、外國船と紛れない爲に、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗とは言はず、總船印と稱してゐた。其所で幕府は有司に命を下

(二)今神奈川縣(相模國)浦賀町。橫須賀市の東南約八キロメートル。

德川齊昭

衆議紛々

し、意見を奉らしめた所、評定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大目附、目附等は中黑を用ふべしと主張し、衆議紛々として、何等決する所がなく終つた。

翌安政元年五月、再び國旗制定の論が起つて、大目附、目附等は總船印には中黑を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黑は新田の中黑など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを我が日本國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顚倒したもので、その當を得ぬ。苟くも國意を代表して威を萬國に輝かす國旗には、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黑を以て印とすべしと論じて、その旨を

幕府に建議された。けれども大目附、目附等は前議を固執して動かない。そこで烈公は七月一日再び建議案を奉り、中黑を以て國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ衆議を排して、七月十一日次の如き發令があつた、

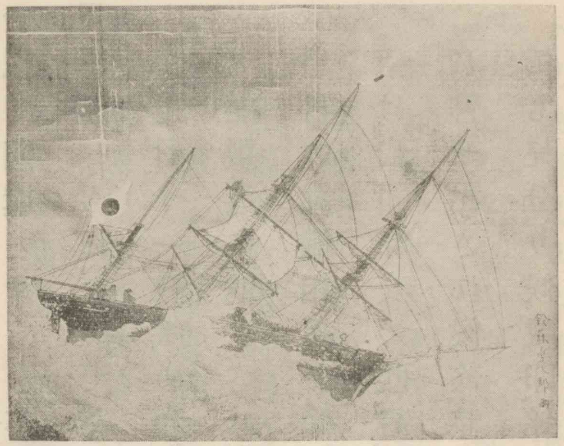
大船製造に就きては、異國船に紛れぬ樣、日本總船印は白地日の丸幟相用ひ候樣仰せ出され候。且また公儀御船の儀は、白紺布交の吹貫、帆中柱に相建て、帆の儀は白地中黑に仰せ出され候條、諸家に於ても白地は相用ひず、遠方にても見分り候帆印、銘々勝手次第相用ひ申すべく候。尤も帆印は、その家の船にても、かねて書出し置候樣致さるべ

(一)遣米使節。豐前守と稱した。安政六年（二五一九年）外國奉行となり、同七年正月、米國に使した。この時新見、村垣淡路守、小栗豐後守等は米國軍艦に乘り、勝安芳、木村圖書等は、咸臨丸に塔した。

く候。右大船の儀、平常廻米の外、運送に相用ひ候儀、勝手次第に候へども、出來の上は、乘組人數並びに海路乘筋、運送方等、猶取調べ相伺はせらるべく候。右之通相觸れらるべく候。」

かくの如く烈公の努力によつて、我が旗印は光榮ある日章旗と定まつたのである。

後數年を經て安政七年、外國奉行新見(一)正興等が北米合衆國に使し、條約の批准交換を行つた。この時始めて堂々日章旗を飜して、かの國に行つたので



咸臨丸

意匠

遼遠

晦冥

(一)第三十三代推古天皇に仕へ、同十五年隋に使した。

あるが、かの國人はその壯烈な意匠を見て、驚歎したといふ事である。

國旗はかくの如くにして定まつたが、その紋章の由つて來つた所は甚だ遼遠である。畏くも皇祖の御名は、天照大神または大日孁貴（おほひるめむち）と申し奉り、大神一たび天の岩戸に隱れさせ給へば、天地爲に晦冥になつたといふのは、天日とその德を等しくし給へる事を物語るのである。隨つて天皇の御位を天つ日嗣と申し、皇太子を日嗣の御子、日並皇子など申し奉つてゐる。聖德太子が小野妹子(一)を隋に遣し給ふや、その國書にいはく「日出づる所の天子、書を日沒する所の天子に致す。」と。またいはく「東天皇敬みて西皇帝に白す。」と。げにや我が

皓潔

(一)音樂理論家。國學院大學教授。明治十年大阪市に生れた。日本音樂の話、東洋音樂原理、音樂論等の著がある。

國はアジヤの東方に位し、日出づる所の國である。旭日の輝輝たる光は熱烈活動の樣を示し、その眞紅の色は皓潔至誠の情を示してゐる。我が日本の標號とするに日章を措いて他に何があらう。

—面白い日本歷史の話—

一五　國歌の話

田邊尚雄(一)

一國の音樂がどれ程その國の人情に左右されるかといふ事は、國歌などを見ると最もよく分る。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較する事にもなり、またその國民の氣風性質などを知る便りともなる。今試に西洋の三大音樂國と言はれてゐるイタリー、フランス、ドイツ三國に就いて、その國歌を較べてみよう。

最初先づフランスの國歌「マルセーエイズ曲」(一)に就いて考へてみると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帶びてゐる。隨つて國歌の上には尊嚴といふものがない。そのかはり感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふ事が、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊にそれが著しい。この意味でマルセーエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌としてふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理

(一)La Marseillaise.

貴族的好尚

剽悍

理性

皇室中心主義

(一)「聲は雷の如く劍の響と波の音とに交りて聞ゆ。ラインよ、ラインよ、ドイツ國のラインよと。この河の防禦者は誰ぞ。安んぜよ、愛する祖國。ライン河の守は立てり。堅固に且忠實に」。

(二)「ドイツ人の祖國やいづこ。プロシャか、はたスワビアか。葡萄の實のるラインの岸か。かもめの泳ぐバルチックの濱か。否、否、否。我が國は更に大なるべし。」

性が明らかで、徒に感情に走らない。隨つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのが、また我が國や、イギリス、ロシヤなどと甚だ違つてゐる。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛國といふ事は、卽ち皇室を尊重する事である。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得る事を喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。隨つて國歌には、我が國の樣に皇室尊崇などといふよりは、他國に對する示威を旨としてゐる樣な趣が認められる。この點がドイツ國歌の特徴である。それは準國歌たる(一)「ラインの守」及び同じく準國歌たる(二)「ドイツ人の祖國やいづこか」を

(一)Royal March of Italy.

見るとよく分る。斯樣にドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが示威的であるのに反して、フランスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を見ただけで、かの歐洲大戰爭の光景が、目に見える樣に感じられる。

飜つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌と言へば(一)「ロイヤルマーチ・オブ・イタリー」と稱せられる軍歌風の進行曲であつて、歌ではない。これはなか〳〵面白く、愉快に出來てはゐるが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歷史によるものである。イタリーが現今の樣に統一さ

れて帝國となつたのは、今から僅か(一)七十年程前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、隨つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且またイタリーでは從來音樂が頗る發達して、作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が內容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲を飾り過ぎてしまつたのである。

さて日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮內省雅樂

(一)宮內省雅樂部副長。明治二十九年歿、年六十六。

部の(一)林廣守の作曲で、割合に新しいものであるに拘らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の意匠と、國歌なる「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を示す表徵となつてゐると言つてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を著けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則とつて作られたのが、現今の「君が代」である。我が國の國歌が、かゝる宮中の雅樂師、しかもその老輩の手に成つたといふのは、ちよつと異樣であるが、實はそ

林廣守

れが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞に大和民族の眞情を流露した音樂である。かの神武天皇御作の久米舞などは、いかにも雄大且莊嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚歎するといふ事である。斯樣に大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂が、いはゆる雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が、「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも形式に於て可なり立派なものであるといふのは、當然な事である。

(一)小説家。名は金之助。東京市の人。大正五年歿、年五十。吾輩は猫である、草枕、虞美人草、文學評論等の著がある。今漱石全集二十卷がある。

(二)frockcoat.

(三)melton.（フロックコートの服地）

屠蘇　新年に飲む酒に浸す藥。屠蘇延命散ともいふ。此所ではこれを浸した屠蘇酒のこと。元且にこれを飲めば一年の邪氣を避け齡を延すといはれる。

自修文

元日

夏目(なつめ)漱石(そうせき)(一)

夏目漱石

雜煮を食べて書齋に引取ると、暫くして三四人來た。何れも若い男である。そのうちの一人がフロック(二)を著てゐる。著なれないせゐか、メルトン(三)に對して妙に遠慮する傾がある。あとの者は皆和服で、且不斷著のまゝだから、とんと正月らしくない。この連中がフロックを眺めて「やあ、〱。」と一つづゝ言つた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで「やあ。」と言つた。

フロックは白い手巾(はんけち)を出して、用もない顔を拭いた。さうして頻りに屠蘇(とそ)を飲んだ。ほかの連中も大いに膳の物を突つついてゐ

(一)俳人高濱虚子。
きまつてゐる　きちんとをさまり返つてゐる樣をいふ。
曖昧　はつきりしてゐないこと。
素人　專門外の人。

る。所へ(一)虚子が車で來た。これは黒い羽織に黒い紋附を著て、極めて舊式にきまつてゐる。「あなたは黒紋附を持つてゐますか。やはり能をやるからその必要があるんでせう。」と聞いたら、虚子が「ええ、さうです。」と答へた。さうして「一つ謠ひませんか。」と言出した。自分は「謠つてもよう御座んす。」と應じた。

それから二人して「東北」を謠つた。餘程以前に習つただけで、殆ど復習といふ事をやらないから、所々甚だ曖昧である。その上、我ながらおぼつかない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聽いてゐる若い連中が、申し合せた樣に、自分をまづいと言出した。中にもフロックは「あなたの聲はひよろ〳〵してゐる。」と言つた。この連中は、元來謠の「う」の字も心得ない者どもである。だから虚子と自分との優劣は、とても分らないだらうと思つてゐた。しかし、批評をされて見ると、素人でも理の當然な所だから已むを得ない。「ばかを

所望　のぞむこと。
斬新　目新しいこと。
紋服　紋附の著物。

言へ。」といふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が、近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、「一つ打つて御覽なさい。是非お聞かせなさい。」と所望してゐる。虚子は自分に「ぢや、あなた謠つて下さい。」と依賴した。これは囃の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、また斬新といふ興味もあつた。「謠ひませう。」と引受けた。虚子は車夫を走らして、鼓を取寄せた。鼓が來ると、臺所から七輪を持つて來さして、かん〳〵いふ炭火の上で、鼓の皮をあぶり始めた。みんな驚いて見てゐる。自分もこの猛烈なあぶり方には驚いた。「大丈夫ですか。」と尋ねたら、「えゝ大丈夫です。」と答へながら、指の先で張切つた皮の上を「かん」と彈いた。ちよつと好い音がした。「もういゝでせう。」と七輪からおろして、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が赤い緒をいぢくつてゐる所が、何となく品がよ

領承す　承諾する。
萎靡因循　氣勢が鈍つてぐづ〳〵すること。

い。今度はみんな感心して見てゐる。
　虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱へこんだ。自分は「少し待つてくれ。」と頼んだ。第一、彼がどこいらで鼓を打つか、見當がつかないから、ちよつと打合せをしたい。虚子は、此所で掛聲をいくつかけて、此所で鼓をどう打つから、おやりなさいと、懇に説明してくれた。自分にはとても呑みこめない。けれども、合點の行くまで研究してゐれば、二三時間はかゝる。已むを得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひ出した。「春霞たなびきにけり。」と半行程來るうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力である。けれども途中から急に振ひ出しては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循のまゝ少し押して行くと、虚子がやにはに大きな掛聲を掛けて、鼓を「かん」と一つ打つた。
　自分は虚子がかう猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなか

悠長　ゆつくりしてゐること。
威嚇する　おどかす。
謠ひ納める　終まで謠ふ。

つた。元來が優美な、悠長な物とばかり考へてゐた掛聲は、まるで眞劍勝負のそれの樣に、自分の鼓膜を動かした。自分の謠は、この掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虚子がまた腹一杯に橫間から威嚇した。自分の聲は威嚇されるたびによろ〳〵する。さうして小さくなる。暫くすると、聞いてゐる者がくす〳〵笑ひ出した。自分も内心からばか〳〵しくなつた。その一時フロックが眞先に立つて、どつと吹出した。自分も調子につれて、一緒に吹出した。
　それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは最も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、し方なしに、自分の鼓に自分の謠を合せて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならない所があると言つて、車に乗つて歸つて行つた。

——漱石全集——

(一)文學者。名は芳衞。高知市の人。大正十四年殁、年五十七。黄菊白菊、源氏と平氏、學生訓等の著があり、桂月全集十二巻に收められたゐる。

一六　清淨の國

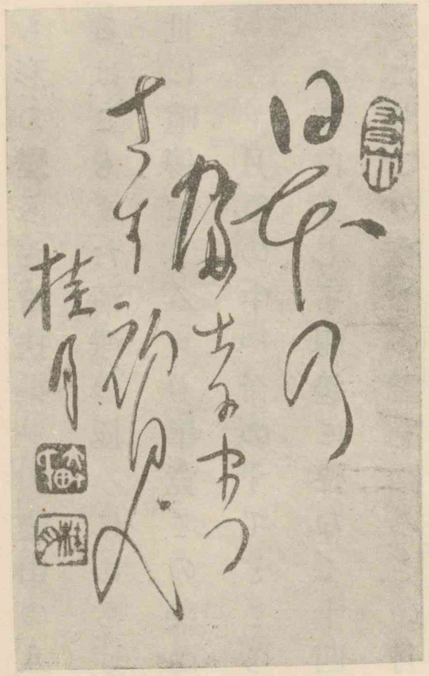
大町桂月(一)

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質とも言ふべきは、清淨の國なる事なり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざる者は、到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人問はば
　あさ日ににほふ山櫻花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日中にて最も清々しき

日本の富士
にまつさす
初日哉
　桂月



大町桂月筆蹟

時なり。空に些かの曇もなき時、東天に朝日の輝き出づるは、實に清爽なるものなり。その清暉に櫻花中の粹たる山櫻のぱつと映發せるは、尚更に清々しきものなり。朝、晴天、日の出、山櫻、これだけの好き道具がそろはば、何人か爽快を覺えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し。日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどと言ふは、枝葉の事のみ。

(一)萬葉集卷三、山部赤人の歌。

扶桑

喧傳す

(二)榎本其角の句。其角は江戸時代の俳人。江戸の人。寶永四年（二三六七年）歿、四十七。

(一)田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ
　ふじのたかねに雪は降りける

綠波一面、鏡の如き田子の浦、そのあなたに何所より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏天を擎げて立てるは、こもまた清淨の極みにあらずや。この歌が名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

(二)月雪の中や命のすてどころ

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月ひとり天にさえたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃を煌かして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣屋敷にて催され

し俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、清淨の美を身解せる人なり。而して義士の中に加れる大高子葉は、實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も、俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術、文藝、一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きもまた然り。近時、外國趣味の入來るにつれて、妖艷なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は、必ずや清淨なり。また建築に於ても然り。日

光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人は唯華麗を感ずるのみにして、尊さを感ずる事薄し。然るに一たび去つて伊勢の大廟に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、そゞろに西行の歌の[1]しのばるゝを覺えずんばあらず。若し大廟に向つて壯大を求め、華麗を求むる者あらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたる所ある者と言はざるべからず。

滄海の中にありて山靑く水清き我が日本は、土地その物が既に清淨なり。開闢以來未だ曾て外國に汚されざる我が三千年の歷史が既に清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が既に清淨なり。しかのみならず、我が國

(一)「なにごとのおはしますかは知られどもかたじけなさに涙こぼるゝ」

民は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて强を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流さへ解して、物のあはれを知れる清淨なる人間なり。我が日本が古來東海の君子國と呼ばるゝも、宜なるかな。

一七　伸びて行く力

[1]小林一郎

若い人は賴もしい。若い人は伸びて行く力をもつてゐる。この伸びて行く力が國の寶である。世の寶である。何物もこの力を遮る事は出來ない。すべての幸福と光榮とがこの中から生れ出る。

(一)文學者。中央大學教授。明治九年東京市に生れた。一生、芭蕉翁の一生、芭蕉句集評釋等の著がある。

討究する

偉人は何時までも若い人である。何時までも伸びて行く力を失はぬ人である。若い人の眼にはすべての物が新しく見える。若い人の耳にはすべての聲が新しく聞える。新しい物は貴い新しい聲は美しい。これを讃歎し、これを討究する。此所に進歩があり、希望がある。

かしの實の一粒を地の中へ埋めて置く。暖い日の光が絶えずその上を照してゐる。かしの實は日の光に招かれて新しい芽を出す。この芽は堅い大地を裂いて、ずん／＼と伸びて行く。青い空の方へ、麗しい日の方へと伸びて行く。若い人の心が卽ちこれである。

何事をか知りたい。何事をか爲したい。これが若い人の心

である。若い人の心は何時も青い大空の果から招かれてゐる。さうしてずん／＼と伸びて行かなければ止まない。この心の何時までも續く者が偉人である。偉人は死ぬまで若い人である。

世界は常に若く、常に新しい。天地の間は創造の力に充ちてゐる。よく眼を見張つて眺め、よく耳を澄して聽けば、何時でも新しい物がある。何時でも新しい聲が聞える。我等の前には何時でも知るべき事があり、爲すべき事がある。

人生に興味をもたぬ人がある。それは自分で自分の力を限り、自分で自分の境界を狹くした人である。眼の前の小さい利害損得に囚はれてしまへば、伸びて行く力はなくなる。

芽を伸す事の出來ぬ木は枯れる。人もまたそれと同じ事である。

頭にはまだ白髮も生えぬうちに、心は老い朽ちた人が少くない。彼は何時も小さい問題に齷齪として、勝つ事を求め、得る事を貪つて居り、負ければ悲しんで泣くが、勝つても復讐を恐れて、その心は安らかでない。失へば落膽するが、得てもまた失はん事を恐れて、その心は靜かでない。

かくして疲れ〳〵て、人生の路をとぼ〳〵と歩いてゐる。

かくして百年の壽を保つたとて、何の意味があらう。これは生きてゐるのではない。死んでゐるのである。朽ちてゐるのである。その身體は魂の脱殼である。その脱殼をきらびやか

な著物に包み、廣い部屋の中に置いて何の意味があらう。

我等の頭の上には涯りない空が廣がつてゐるではないか。我等の心もまた涯りないまで伸びて行くべきである。力を振へばその力がまた新たなる力を生む。日に〳〵新たなる活動が續けば、日に〳〵新たなる希望が湧く。是に不斷の悦がある。

我等はいかなる境遇にあつても、常に自由でなければならない。境遇に制せられず、自ら境遇を制して行くのが眞の生き方である。富むもよい。貧しいのもよい。富む人に適した仕事もある。貧しい人に適した仕事もある。顯れてもよい。隱れてもよい。顯れた働も價値がある。隱れた働には更に價値

時めく

(一)哲學者、文學博士。東京帝國大學教授。明治八年茨城縣に生れた。國民道德要義、社會創作への道、思想と國家等の著がある。

がある。

偉人とは世に時めく人の事ではない。いかなる場所に置いても、意義ある生涯を作つて行く人の事である。利害の爲でなく、損得の爲でなく、自分の心の伸びて行く力に滿足を感ずる人の事である。かゝる人は常に創造をしてゐるのである。常に世を新しくしてゐるのである。

伸びて行く力をもつ若い人は頼もしい。その力を何時までも失つてはならない。身體は老いても、心は何時も若くてあるべきである。

一八 青年と勇氣

深作安文(一)

青年期は人の生涯中、最も勇氣に富んだ時期である。通例、動物が敵から襲はれた時には、二通りの態度を執るものである。その一つは、それを恐れて逃げる事で、他の一つは、怒つて抵抗する事である。後者は虎や獅子の如き猛獸に見る所で、前者はその餌食となる小動物に見る所である。これは何れも動物の本性に基づくのであつて、よつて自らを保存するのである。

これに似た事實が我々人類の間にも存在する。世間には恐るべき物に出會つて恐れない人があり、反對に、恐るべからざる物に出會つて恐れる人がある。恐るべき物を恐れないのは暴であつて、恐るまじき物を恐れるのは怯である。恐

姿相

脅威

るべきに恐れ、恐るまじきに恐れないのが勇である。

この故に、勇氣には知的要素が存するのである。その出會つた人なり物なりの眞の姿相を見分けて、恐るべき理由のある物であれば恐れ、恐るべからざる物であれば恐れないからである。されば、勇氣は己が強き意志を以て苦痛なり、困難なり、はたまた脅威なりから起る恐怖心に抵抗する態度を言ふのである。重ねて言へば、先づその事物の眞相を究めてこれに對する方法を考へ、その一度決心するや斷乎として己が信ずる所を行ひ、いかなる困難にも屈せず、その目的を貫いて然る後止む態度である。若し事がらの性質を考へず、これに對する方法を定めず、唯妄りに突進するのは、暴で

あつて、勇ではない。

故に、勇氣は注意を細かくして事に當り、己が目的を貫く爲には何物も恐れない態度に外ならぬ。私は繰返して言はうと思ふ、勇氣には知的要素が含まれてゐると。

凡そ人類の恐るべき敵は、猛獸ではなくてやはり人類である。而して人類の恐るべき攻撃の武器は、爪でも牙でもなくて智である。この事は、人と獸との間の戰に於て見出される。卽ち、弱い獸類は人を見ると直ちに逃去り、強い獸類は人に對して抵抗する。けれども、何れも己を保存する目的を達し得ないで、或は捕へられ、或は殺されたりする。恐は臆病者を死地に陷らせ、怒は亂暴者を同じく死地に陷らしめる。

この故に、智慧といふ武器を以て攻めかゝつて來る者には、やはり智慧といふ武器を以て向ふべきである。卽ち恐怖を去り、危險を冒し、強き意志を以てこれに對抗するのである。これが眞の勇氣である。

勇氣には二つの種類がある。その一つは積極的のもので、かのいはゆる水火をも恐れず、白刃にも屈せず、直ちに進んで危難に當る事を言ひ、他の一つは消極的のもので、苦痛や危難の到底免れる事の出來ないものである事を知つた以上、十分な覺悟を以てこれに向ひ、怨まず、歎かず、以て己が運命に堪へる事である。例へば、君主の命を奉じて生命を捨て國家の爲に戰ふ軍人の勇氣の如きは前者に屬し、新たに道

徳を說き、また新たに宗教を唱へて世間の誤解を招き、甚だしきに至つては、遂にその生命をも犧牲にする道德家、宗教家などの勇氣は、後者に屬するのである。

以上の二つの勇氣は、何れも必要なものであつて、我々は己が出會ふ種々の場合に應じてこれが選擇を誤らぬ樣にすべきである。

元來、勇氣は戰爭に關係のあるものである。これがなければ到底勝利を得る事が出來ないからである。けれども平和時代となつて、法律が整ひ、警察や裁判など種々の制度が行屆いて來て、政府や國家が人民の生命、財産、自由、名譽などを保護する事となると、戰爭時代の勇氣は次第に重んぜられ

なくなつて、平和時代の勇氣がこれに代つて尊重されて來るのである。

平和時代の勇氣に二通りある。一つを思想の獨立と言ひ、一つを自信と言ふのである。前者はどこまでも眞理と正義とを標的として進み、他人の誘惑する所ともならず、またその脅威する所ともならず、公明正大に己の人格を働かせる事を言ふのである。後者は堅く自分の恃むべき所を捉へて事に當り、必要な場合には、他人の意見を打碎いても己の意志を貫く態度である。

元來、野蠻人は己が生活をなす上に專ら自然界にたよるのであるが、文化人に至つては、自然界よりも寧ろ同類にたよるのである。その上、文化生活は人の貴賤貧富の差を甚だしくさせるから、おのづから倨傲、卑屈、追從、讒言などの種々の不德を生ぜしめるのである。この時、どこまでも己を信じ、己が良心に忠實な態度が重んぜられなければならぬ。そこに思想の獨立と自信とが重んぜられて來るのである。

倨傲

平和時代に男子らしい生活をする爲には、何人も以上の二つの勇氣を備ふべきである。殊に青年期は勇氣に滿ちた時代であるから、眞勇を養つて、思想の獨立と自信とを以て事に當る必要がある。そこにおのづと人格價値が備つて來るのである。

律儀
戒行
住持

一九　師の恩

柳澤淇園

江戸下谷(したや)高岸寺といふに、何時の頃にか弟子の僧二人ありけるが、一人は身持律儀にして、常々寺の爲ともなるべき事のみに心を盡せど、一人の僧は戒行をも保たで大酒を好み、いさかひなどして、萬づ私多かりしが、或時什物を取出して賣るを、一人の僧見て諫を加へけれども、聞入れざりければ、この由を住持に告げ「かの僧追出し給はずば、寺の爲にもなるべからず。」と言ふに、住持は「ひとまづ諭し見るべし。」とて、嚴しく戒めたるまゝにて捨置きぬ。また或時佛具を取出して賣りたるを聞きて、一人の僧また住持が許に行きて「惡僧

（依怙）

このたびは佛具を盜み出し賣りたり。我等諫めたりとて更に用ふる所もなく、住持も捨置き給へば、是非に及ばず。我は行く〳〵禍の寺に及びて、身にもかゝらん事を恐れ思へり。若し彼を追出し給はずば、我に暇を賜はるべし。」と言ふに、住持は涙を浮べ「さあらば、願のまゝにその方に暇をつかはすべし。惡僧は今暫し我が傍に置きて、おひ〳〵諭すべし。」と言ふに、この僧大いに住持を怨み「我等暇を乞はば、惡僧を追出し給はんと思ふものから、それを却りて罪なき我等に暇賜はる事、近頃えこの心にあらずや。」と言へば、住持答へて「さにあらず。御身は今我が寺を出でたりとも、何所へ行きてもはや僧一人の勤はなる者なり。惡僧は今我が傍を離れなば、忽

ち捕はれて罪人とならんも測り難し。さすれば我が徳もすたれて、一人の弟子を失ふなり。故に今暫しは傍に置きて、彼が命をも延し、且は嚴しく教誡をもせば、善心に立返る事もあるべし。それを樂しみに我が傍を放つ事をせざるなり。」と言へば、この由を聞きて、惡僧も師の高恩に感じ、やがて善心に返りきとぞ。

——雲萍雜志——

二〇 春の水

米つきをするとは見えぬ春の水
武者一人叱られてゐる土用干
轉寢(うたゝね)の顏へ一冊屋根にふき
本降りになつて出て行く雨やどり
よつぴいてひやうと放たぬ案山子かな
わらんぢを穿くと二足踏んで見る
笑うたもあとからこけるすべり路
大佛は見るものにして尊まず
孝行のしたい時分に親はなし
泣く〳〵もよい方を取る形見わけ

二一 本多重次

新井白石(一)

天正十三年徳川殿御背中に疔といふ物出で來て、既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれどもその驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御あとの事ども仰せ置か

(一)江戸時代の學者。名は君美。將軍家宣に仕へた。享保十年(二三八五年)歿、年六十九。讀史餘論、藩翰譜、折りたく柴の記、西洋紀聞等の著がある。

(一)通稱作左衛門。三河の人。文祿五年(二二五六年)歿、年六十八。

あつたらしき命

る。人々の周章言ふに及ばず、土民、百姓等に至るまで、その程程に隨ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

(一)重次御枕に取附きて泣く〳〵申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん。重次が昔この病を受けしに、立所に驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す。この上醫療そのせんなし。且は命を惜しむに似たり。」とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、「斯程大事の腫物輕々しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治しまゐらせんとするをも用ひ給はず、失せ給はん事、御心がらとは言ひながら、あつたらしき命かな。諸醫術

盡きぬと申す上は、彼いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が御あとにさがつての御供かなふべからず。さらば御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。

德川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引止め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」と言ふ。重次大いに聲を怒らして、「最後の暇乞うて罷り申す者を、見苦しい殿ばらの止め樣や。」と罵つて、出でんとす。「されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」と言はれて、「げにさも候。」とて、御前に參る。

德川殿「汝は物に狂ひてかくは言ふか。家康まだ死し果て

おきてす

ぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼にこそ死すべけれ。また汝等もいかにもして一日も世に殘りて、若き者どもおきてして、我が家の絶えざらん樣を計らんとは思はずして、せんなき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや〳〵、それは人によりての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、そのせんなし。重次若年の昔より此所彼所の軍に從ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次身一つに餘つて、世に交らん事かなふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くならせ給ひなば、他人

(一)家康の女婿北條氏直。天正十八年(二二五〇年)歿、年三十。

踵を回らす

さらぬ人

までも候まじ、先づ御婿の(一)北條殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に忽ち別れて氣後れし、はか〳〵しき矢の一筋をも射出す事かなふべからず。當家滅されん事、また踵を回らすべからず。重次それまで存へて『あの年よつたるかたは者は、徳川殿の譜代にて、何がしと言はれし家人なるが、いかに惜しき命なればかく世に恥をさらすらん。』と後指さゝれん事、老の恥、何事かこれに過ぎ候べき。この頃までも武田の人々御當家へ召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを、世にも哀に思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れまゐらせせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の

(丈)

果もあさましきによつて、御先に死する事にて候。」と申す。「汝が言ふ所ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生殘つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や。」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰をや背くべき。」と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし。」と申せば、重次もぐさ取つて据う。御灸の痛、覺えさせ給はねば、もぐさを增し加ふる事多くして後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御藥をつけてまゐらせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに

伺候

(一)江戸時代の儒者、經濟家、名は晉。豐後の人。寛政元年(二四四九年)歿、年六十七。價原、梅園三語、梅園叢書等の著がある。

(二)支那宋代の政治家、歷史家。名は光、字は君實。元祐元年(西紀一〇八六年)歿、年六十八。

御腫物潰れて、膿水、血夥しう流れ出で、御惱立所に輕ませ給へば、重次は嬉し涙に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。

——藩翰譜——

二二　誠といふ説

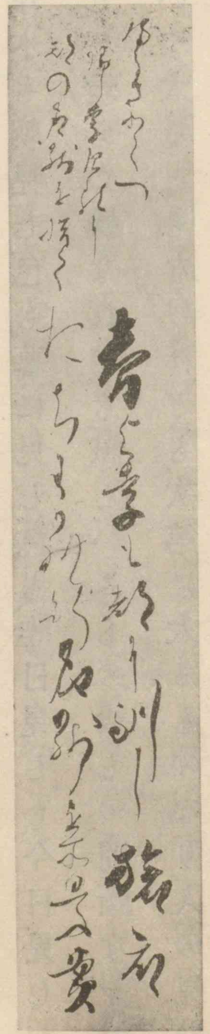
三浦梅園(一)

一勺の水を海に入れて、海の水增したりと言はんは愚かなり。增さずと言ふは妄なり。水を加ふる所は我にして、增すと增さざるとは我にあらざるもの、强ひてその辨を求めずして可なり。我にある所の誠を盡す。これ君子の道なり。

誠とは、うそを言はざる事とのみ心得たらんは、愚かなる事なり。或人、司馬溫公(二)に誠に入る道を問ひければ、妄語せざ

るより入るとぞ。成程、妄りに語らず、うそを言はぬより誠の道には入るなれども、うそを言はぬばかりを誠とは言はぬなり。僞を言はぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。けしの子(み)、煙草の實は至りて小さき物なり、地に落せば目にもかゝらぬ樣なれども、内に一つの誠といふものありて、奪ふべからず、隱すべからず、晦ますべからず、覆ふべからず。その時到るに及びては、芽を出し、葉を生じ、花を開き、實を結ぶ。その子を水に腐らし火に燒きて、芽を出さずと言ふは、その子の尤(とが)ならんや。これによりて、物の子を實と言ふは、實は卽ち誠なり。一つも誠ならざるものありて腐れたるものは生ぜず、痛みたる苗はかじく。人の誠も猶かくの如し。

昔(一)衞(二)の靈公といひし君、夜夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙かに車の轟く音しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎてまた鳴りけり。靈公「誰なるべきか。」と南子に問ひ給ひければ「これ蘧(三)伯玉なるべし。禮に公門に下り、路馬に式すといふ事あり。忠臣と孝子とは昭々の爲に節をのべず、冥々の爲に行を惰らずと言へり。蘧伯玉は衞の賢人なり。夜なればとて禮を廢せじ。」と言ひけり。靈公人を遣して見しめけるに、果して伯玉にてありけり。人知るまじとて欺くは妄なり。四知


三浦梅園筆蹟

(一)この話は列女傳及び小學に見える。
(二)衞は支那春秋時代の國。今の河南省衞輝府の地。靈公名は元、西紀前四九三年歿、在位四十二年。
闕下
ふるさとへ歸りけるに都の名殘を惜て
春よりも都に馴し旅衣たちわかれ行名殘をぞ思ふ　安貞
(三)名は瑗。衞の人。賢大夫として知られてゐる。

はずにあふ

と言ひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る。いかでか覆ひ隠すべき。

譬へば、一升の米、日々二三十粒を取らんとも措かんとも、知れざるべし。然れども、久しく措く時は増し、取る時は減る。草木も朝見し色も、暮に見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬ様なれども、誠といふもの少しの間斷なき故に、いつ太るともなけれども、次第に太るものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。深き谷の蘭も、遙かなる山の紅葉も、人なくともよく薫り、美しく照ればこそ、人至りたる時も香清く、色麗しけれ。人の至るを待ちて香を放ち、色を出さんとせば、はずにあふ事あるべから

ず。常々心にかけて、掃き拭きしたらん座席と、俄に蜘蛛の網取り杜拭きたらんとは、いかでか見紛ふべき。人平生を嗜まずして、その期に臨み僞り飾らんは、誠の俄掃除なるべし。「なき名ぞと人にはいひてありぬべし心のとはばいかゞこたへん」の歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を省て、いかに今の如く誠ならざる事をばせしぞ、言ひしぞ、人をば欺くに、などて自らの心を自らは欺けるぞと咎めたらんには、おのづから恥づかしくなり、獨りゐても額より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、「僞なき旨を起請を以て申し上ぐべし。」とありければ、「我一生僞を言ひし事なし。僞なしと申す上は、この事に限りて起請をば書くまじ。」とて、終に書

かざりしこそ、勝れていみじく聞え侍れ。

人は我意のある者故に、一旦我が言出しゝ詞は、たとひ惡しと案じ當りても、是非言募りて、我を立つるものなり。これ朽ちたる實の如し。實といふ物の値を失ひたるなり。常式の者この意あれば、人に憎み疎ぜられ、人の主人、奉行、頭人なんどこの意あれば、人をやぶり國をそこなふ。北條泰時政をせられける時、下總國の或地頭、領家の代官と爭論あり、對決に及ぶ時、領家尤もなる道理申し立てければ、地頭手をはたとうち、泰時の方に向ひ、「あら負や。」と言ひければ、並みゐける人人一同に笑ひけり。泰時うち聞きて「いみじくも負けける者かな。某代官として久しく成敗しつれども、かゝる事承らず。

あはれ負けぬると聞ゆる人も、かなはぬまでも陳ずる習なるに、前の一通りさもと聞ゆる所、領家の御代官申さるゝ所、肝心と聞ゆるにつき、何事なく負け給へる事、返す〳〵もいみじく聞え侍り。正直の人にて御座ありけり。」とて、うち涙ぐみ感じ申されければ、初め笑ひつる人々は、にがりきりてぞ見えける。これにより訴論殊更の僻事もなかりけるにこそとて、負け樣を感じ、六年の未進の物三年まで赦しけり。たとひ訴論負けになり、いかなる事にあはんとも、僞は言ふべからずと、我が心を欺かぬ誠故、人もかくは感ぜしなり。

自修文

延喜、天曆の帝

(一)中村孝也

延喜、天曆と言へば、昔から聖の御代と呼ばれて、あこがれの時代であつた。それは醍醐(二)天皇と、村上(三)天皇との御治世であつた。醍醐天皇は非常に聰明にわたらせ給ひ、慈愛の御心深くいらせられた。何時もにこやかな御笑顏をあそばし、

「嚴めしい顏をする人には物を言ひにくい。うち解けた氣色の人には物を言ひやすい。大きな事も小さな事も餘さず聽きたいから、自分は何時も和やかにするのぢや。」

と仰せられた。

或冬の晩であつた。木枯が吹きわたる。雪がちら〳〵降る。しとみ戸を卸し、火桶に炭火を眞赤にいけても、夜寒はしん〳〵として身に浸みた。短檠の燈を搔きたてて書見をしてをられた天皇は、流石にお寒さうに、御次の侍臣どもを顧られた。彼等は何か御用召の事と心得て、御前に跪いた。

「大層寒い晩だが、下々の者はさぞ難儀であらうの。」

との御言葉。彼等は御慈愛の御心に感激して、唯

「はつ。」

と平伏するばかりであつた。天皇はしみ〳〵した御口調で仰せ續けられた、

「この樣な御殿の奧深くに暖にしてゐる自分ですら、身に浸みる今宵の寒氣ぢや。下々の者はさぞ寒いだらうとは思ふけれど、この厚著では想像もつくまい。」

そしてふとお起ちになつて、恐多い事ながら、御上著をお脱ぎになられてじつとお考へこみあそばされた。

侍臣の者たちの頰には、熱い淚がとめどもなく流れた。

(一)歷史家、文學博士。史料編纂官兼東京帝國大學助教授。明治十八年群馬縣に生れた。しら菊、源九郎義經、英俊傳等の著がある。

(二)第六十代。

(三)第六十二代。

しとみ戸 日除の戸。風雨を防ぐ。細い木を縦橫に組んで格子とし格子の間を板張としたもの。

短檠 たけの短い燈臺。

口調 いひぶり。いひやう。

權勢　いきほひ。ゐせい。權力。
勵精　心をはげます。精神を奮起する。
堪能　よくすること。上手。
宿衣　とのゐさうぞく。即ち衣冠の稱。
等閑　意を用ひないこと。なほざり。
寛裕溫恕　心がひろくて思ひやりのあること。

この頃は藤原氏一門の者が漸く權勢を張つて來て、朝廷の御威光は次第に昔の樣ではなくならうとしてゐた。賢明な天皇がこれを御慨きあそばされたのは、申すまでもなかつた。

或夏の日であつた。御衣の上に蠅が一匹とまつた。天皇はつくづくこれを御覽あそばされて、ほつと溜息をつかれた。

「世の中が衰へかけて來た。自分の運も末になりさうぢや。この樣な事は昔はなかつた事ぢや。」

と仰せられた。かばかり政治に御勵精あらせられたので、世間では延喜の聖帝と稱へて、お慕ひ申してゐる。

村上天皇もまた天性明敏で文學を好み給ひ、和歌、詩文に長じ、琵琶に堪能でいらせられた。御即位の初め、前朝の華美を改められる爲、紅色の宿衣を裂かしめ給ひ、また秀才の推擧を等閑にした寵臣を叱責され、嚴肅の風がおはしました。しかし、元來寛裕溫

會心　心にかなふこと。
紫宸殿　大内裏の正殿をいふ。朝賀、御即位、節會等の公事は此所で行はれる。
出御　おでまし
鬢髮　鬢は耳ぎはの毛、髮は頭上の毛。
霜枯　霜にあつて草木が枯れしぼむこと。此所では鬢の毛が白髮になること。

恕なお方でいらせられ、或日侍臣に向つて、

「自分の政治向に就いて、世間ではどんな評判をしてをるか。」

との御下問があつた。

「さ樣に御座りまする。下々では御寛大にいらせられるとおうはさ申し上げてをる次第で御座りまする。」

と、侍臣は恭しく奉答した。會心の御微笑が御脣邊に動いて、重ねて仰せられた、

「上の者が嚴酷では、下々は堪へられまいな。」

と。

或日紫宸殿に出御された時、偶、一人の老吏に御目を留められた。それは永い年月の宮仕に腰はゆがみ、鬢髮は霜枯のわびしい風情の者であつた。

不憫さうにしげ〲と、その樣子を見守つてをられた天皇は、

咫尺す　接近する。咫尺は近いこと、短いこと。

とみ　きふ。にはか。

微臣　地位の低いけらい。臣下の遜稱。

急に何かお氣が附かれた樣に、その老吏を召してお尋ねあそばされた、

「今の政治と延喜の政治とに就いて、そちはどちらが立勝つてをる樣に思ふか。」

それは實に意外な御下問であつた。天顏に咫尺し奉る上に、重大なお尋ねを承つて、老吏は恐懼の餘り冷汗を流した。何と御奉答申し上ぐべきかに思ひ惑うて、とみには言葉が出ない。天皇は、その飾氣のない正直さうな樣子を、にこやかにお眺めあそばして、御聲を優しくして、繰返し〲お尋ねになつた。

時刻は移る。何時までも無言でゐるのは不敬の至である。老吏は額に汗をにじませたまゝ、平伏して、恭しく言上した、

「お尋ねでは御座りまするなれど、この泰平無事の御代におきまして、微臣どもの申し上ぐべき事とては御座りませぬ。唯氣

叩頭　頭を地につけて禮拜すること。ごくていれいにお時儀すること。

歲貢　一年間のみつぎもの。

繁劇　せはしいこと。いそがしいこと。

の附きました事は、主殿寮から差出しまする松明が多くなりました事と、率分堂のお庭に草がそだちます事とが、昔に違つてをる樣に存じ奉りまする。」

辛うじて言上した老吏は、また恐れ入つて叩頭した。

一語々々じつと傾聽してをられた天皇の御顏に、さつと憂色が流れた。暫く無言で考へてをられたが、正直一途の老吏の樣子を御覽になると、すぐに御氣色も麗しく、

「能く言うてくれた。」

と御賞美の御言葉。老吏はまた更に恐懼して面を擧げる事すら出來なかつた。

主殿寮は政務をあつかふ官廳であつた。率分堂は大藏省に收納する歲貢を藏める所であつた。その主殿寮では、政務が繁劇で夜に及ぶ爲、松明を費す事が多くなりながら、歲貢が減少して財

時弊を穿つ　その時代の惡い箇所を言ひあてる。

(一)德川幕府の儒官。名は直清。江戸の人。享保十九年（二三九四年）歿、年七十七。義人錄、駿臺雜話等の著がある。

(二)第百八代後水尾天皇から第百九代明正天皇の御代、將軍家光の時代。

(三)忠直のこと。家康の第二子秀康の子。大阪夏の陣に發奮して先登の功があつたが、放縱で國務を見ず、亂行に陷つたので、後流された。

登庸

政が窮乏する爲、率分堂の庭上に雜草が繁茂するのである。正直な老吏は、所感をそのまゝに言上したのであつたが、その言葉は正に時弊を穿つてゐる。賢明な天皇が深く慚愧(ざんき)されたのは、恐多い次第であつた。それより益〻政務をお勵みあそばされたので、後世、天皇の御代を醍醐天皇の御代と並び稱して、その年號によつて天曆の聖代と申し奉る。

二三　杉田壹岐　室(一)鳩巢

寛永(二)の頃、越前故伊豫守(三)殿の家老に杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、その身の材をもて微賤より登庸せられ、厚祿を受け國老に列しけり。伊豫守殿參勤にて、一年在江戸のうち費用過分なりしを、常に前年よりしたくして、用

顔を冒す

匡救す

哺時

度足る樣にしけるは、偏に壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顔を冒し直言して、君の過を匡救する事を忘れず。

或時伊豫守殿在國にて鷹狩し、哺時に及びて歸城あり。家老どもに對して「今日若者どものはたらき、何時にすぐれて見えき。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りて、何れも喜び候へ。」とありしかば、家老ども何れも、「御家の爲何よりめでたき御事にて候。」と言ひしに、壹岐一人末座にありけるが、默默としてゐたりしを、何とぞ言ふかと暫く見合せられしが、こらへかねられ「壹岐は何と思ふ。」とありしに、その時壹岐「只

今の御意承り候に、憚ながら慨かはしき御事に存じ候。當時士ども、御鷹野などの御供に出で候とては、さきにて御手討になり候はんも計り難く候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。斯樣に上を疎み候うて、思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべしとも存ぜられず候。それを御承知なく、頼もしく思し召さるとの御意こそ、愚かなる御事にて候へ。」と言ひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀持ちて側にゐたりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」と言ふ。壹岐聞きて、その人をはたとにらみ、「何れもは御鷹野の御供して、猪、猿を追うて駈廻るを御奉公とす。この壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」

とて、そのまゝ脇差を拔いて後へ投捨て、伊豫守殿の側へ進み寄り、「唯御手討にあそばされ候へ。空しくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はば、せめて御恩を報じ奉る志のしるしと存じ候はん。」と言ひて、頸を延べて平伏しけるを見給ひて、何とも言はで、奥へ入られけり。

そのあとにて、前の家老ども壹岐に向ひて、「御爲を思ひて申されしは尤もにて候へども、をりもあるべき事にて候。今日御鷹野より御歸りありしに、御機嫌にて御氣さきを折られ候事は、遠慮もあるべき事にこそ。」と言ひしを、壹岐「君へ諫を申し上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よきをりとてはな

きものにて候。今日はよきついでとこそ存じ候へ。その上某事は、御取立の者にて候へば、各とはわけの違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても、その分の事にて候。」と言ひければ、諸家老各感じ合ひけり。

さて家に歸りつゝ、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日比糟糠の妻のありけるに向ひて、「そこ許に言ひおく事唯一つあり。御身は女の身なれば、ぢきに御恩を受けたるにてはなけれども、我御厚恩を擔ふ故に、足輕の妻と言はれし身が、今歷々の妻とて、大勢の所從に圍繞せらるゝは、限りなき御恩にあらずや。然れば我生害仰せ附けらるゝ後にても、唯朝夕、今までの御恩の有難かりし事を忘れずして、かり

にも上を怨み奉る心あるべからず。若し女心にて、我が身のものうきにつけて、上を怨み奉る樣なる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべし。」と言ひけり。

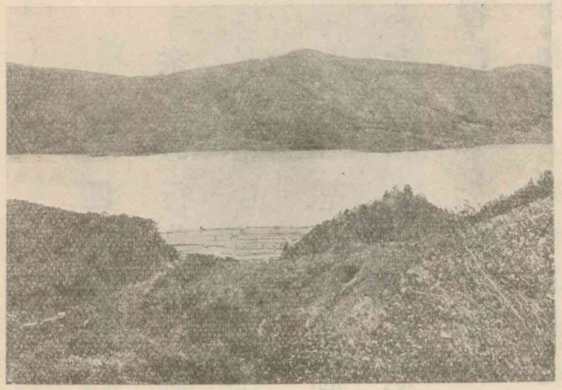
さて今やと待ちけるに、夜更くる程に人來て門を敲きしが、「召あるまゝ登城すべし。」となり。さてこそと思ひて登城しけるに、すぐに寢所に召入れて、「その方が書言ひし事心に掛りて寢られぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。我があやまりたる事は、とかく言ふに及ばず。その方が志を深く感じ思うて滿足す。」との事にて、ぢきに腰の物を賜はりしかば、壹岐も思ひも寄らぬ事にて、覺えず涙に咽びつゝ、拜賜して罷り出

でけるとぞ。

これにつけても思ひ出づるは、同じ越前家の話なり。(一)秀康封に就きし後、阿閉掃部といへる武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。その頃、狛(こま)伊勢(いせ)とて世祿の歴々なりしが、嫡子の鎧著初の式に、掃部を請待して、當年の武功の物語を望まれければ、掃部默し難く、「さらば、某一生のうちに、武者ぶりの見事なる士を一人見申して候。その事を話し申すべし。(二)江州賤ヶ嶽の戰に、暮方に某一騎(三)余吾の湖のわたりを引返し候ひしに、敵と思しき者うしろより聲を掛け、『御不承ながら御相手を。』と進み寄り候故、こなたも望む所と、互に馬を乘放ち、既に槍を合せんとしけるに、その人『しばし御待ち候

(一)關ヶ原役後、越前六十七萬石の領主となつた。慶長十二年(二二六七年)歿、年三十四。
(二)滋賀縣伊香郡伊香具村大字大音の西方にある山。賤ヶ嶽の戰は天正十一年(二二四三年)羽柴秀吉が柴田勝家を破つた戰。
(三)伊香郡余呉村の西、賤ヶ嶽の東北麓にある。

へ。今朝よりの戰に我が槍よごれて候まゝ、洗ひてこそ。』と申し、湖水に槍をうち浸して二三遍洗ひつゝ、『さらば。』とて突合ひしが、久しく勝負なかりし程に日も暮果てければ、彼方よりまた聲を掛け、『もはや槍先も見えず候。御殘り多くは候へども、これまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衞と申す者にて候。』とて、某が名をも聞き、互に後日を約して立別れしが、これ程見事なる武士は終に見侍らず。」と語りけり。をりしも伊勢が許に出入す



余吾の湖

(一)江戸時代の儒者、博物學者。名は篤信。筑前の人。正徳四年(二三七四年)歿、年八十五。慎思錄、大和本草、日本釋名、五常訓等の著がある。

る方齋といへる浪士こそ、かの新兵衛にてありければ、これも厚く召抱へられけりとなん。

――駿臺雜話――

二四　諫を喜ぶべし

貝原益軒(一)

衆人の行、萬事に就きて過と惡とあり。過とは、心に惡なけれども知らずして理(ことわり)にたがひ、或は心附かずして理にちがふを言ふ。惡とは、善惡は知りながら、慾に引かれて理にたがふを言ふ。これ自ら欺くなり。身を修むるには、過惡を改めて善に遷るを務とすべし。聖人には過なし。賢者以下には過なき事なし。殊に凡人には過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人の諫を聞きても用ひず、我に過あれども知らずして、

(一)論語學而篇。

過なしと思ふ人あり。これ自ら修むるに志なき故なり。若し自ら修むる人ならば、過多き事を知るべし。自ら省て我が過を知り、人の諫を聞きて我が過を改め、善に遷るべし。

貝原益軒

常に我が身を省て、先づ我が過を知るべし。既に過を知りなば、速に改むべし。尚書に「過を改むること吝(やぶさか)ならず。」と言へり。吝とは惜しむなり。過を惜しまずして早く改むるを言ふ。孔子も(一)「過つては則ち改むるに憚ること勿れ。」とのたまへり。我が身の過を知らざるは愚なり。過を知りて改めざるは卽ち惡なり。知らずして過つより尚その罪重し。

過は必ず氣質の偏より起る。剛なる人は心強き所より過起り、柔なる人は心弱き所より過起る。氣質の偏なる所に克ちて、過なからん事を求むべし。學者常に我が氣質の偏を察し、その過を省て改むべし。かくの如くせざれば、學問の益なし。これ學者の專ら務め行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏に克つ道なり。氣質の偏なる所には克難し。常に力めて十分の力を用ふべし。

我が身聖人にあらず、過多きはうべなりとて、過を知りながら改めざる人は、むげに道に志なき人なり。自暴自棄と言ふべし。斯樣の志なき人にならひて、我が過を宥すべからず。

人の目は百里の遠きを見れども、その背を見ず。明鏡と雖

もその裏を照さず。離婁(一)が明目なるも、そのまつげを見る事なし。こゝを以て、人知ありと雖も、我が身のあやまりを知り難し。故に君子の學は、專ら我が身を省、人の諫を聞きもちひ、過を知りて改むるをむねとす。子路(二)は、我が過を人の告ぐるを喜べり。故に「百世の師なり。」と孟子(三)も言へり。人を知る事誠に難しといへど、我が身の惡しきを知るは、また人を知るよりも尚難し。こゝをもて、我が過を告げしらする人あらば、誠に喜ぶべし。人僅かなる財を贈り、或は酒肴を贈るも、受くる人これを喜ぶ。況や言難き諫を言ひ、自ら知り難き過を聞くをや。我が身に於てかゝる大いなる益なし。諫を聞く事、豈幸ならずや。子路の喜べる事、うべなるかな。過を聞く事を嫌ひ、

(一)昔支那の目のよく見えた人。
(二)孔子の弟子。姓は仲、名は由、路はその字。
(三)名は軻、字は子輿。魯の鄒の人。孔子の道を傳へて大成した。(西紀前三七二―前二八九年)

諫をふせぐは、悪しき事の至なり。諫を聞きて過を改むるは、醫を招きて病をいやすが如し。過あれども諫をふせぎて、人の正す事を嫌ふは、病を育てて醫を嫌ふが如し。その身を失へども顧ず。悲しむべし。

古の賢者は我が過を聞く事を好み、人の諫を喜べり。諫を聞きて過を改め善に遷らば、道に進む事きはまりなし。善なる事これより大いなるはなし。また古の賢者は人に譽めらるゝを喜ばず、我が善を聞く事を好まず。我が善を聞きては益なきのみならず、若し少しにても我が身にほこる心出で來て、善をなすに怠らば、大いなる害あり。今の人は我が過を聞く事を好まず、人の我を譽むるを悦び、我が善を聞く事を

好む。世にへつらへる小人多き故、譽むる者多し。それを誠ぞと心得て身にほこり、善を行ふに怠るは愚なり。末の世の人は、唐も大和もすべて人の諫を好まず。故に人を諫むるを、ひとへに世なれぬかたくなる人と思へり。父として子を諫むれば、我が父は老耄せりと言ひ、また老人は今の風を知らずとて譏りうらむ。臣として君を諫むれば、おごれり無禮なりとて怒り遠ざく。こゝをもて人毎に世の俗になれ、人の欲にしたがひ、へつらひて諫めず。この風若し世に行はれ風俗となりなば、善は日々にすたり、悪は日々にさかんになりて、道行はるべからず。悲しむべし。およそ諫を言ふ人有難し。古來唐も大和も諫を喜ぶ人は、尤も有難し。故に諫むる人も稀

なり。　―大和俗訓―

二五　告天子

薄田泣菫

「ちゝばる、ちゝばる、ちゝばる。……」

三月上旬の或日の正午過、私が畑に出て土をいぢつてゐると、だしぬけに頭の上の空から金の鈴を振る様な美しい歌が降りそゝいで來た。言ふまでもなく、雲雀が程近い麥畑の巣から離れて、中空高く飛上らうとする立ち際の歌なのだ。

私は頭を上げて空を見た。眼に痛い程きら〱する日光の中を、雲雀が一羽、眞つ直に中空さして駈上らうとしてゐる。

「ちゝばる、ちゝばる、ちいちばる。……」

急調子なその歌に合せて、小さな黒つぽい二つの翼が氣忙しく羽ばたきすると、その度に日光が金粉の様にあたりにぱつと撒きちらされてゐる。

雲雀

雲雀は歌謠の精靈である。彼はそこらの麥畑の土塊（つちくれ）の間に自分の巣を營み、其所では世話好きな親鳥として、何かと細かく氣を配つてこまめに立働きはするが、持つて生れた鋭敏な感受性が、春の回歸を何物よりも早く感ずるにつけて、

精靈

感受性

欣求

芳醇

その藝術家氣質は長く雛の側にゐる事を許さないので、彼は今自分の藝の欲望の動くがまゝに、空の高みを目指して、眞つ直に突進んで行くのだ。空の高みこそは、この歌謠の精靈のあけくれ欣求して止まない靈場で、鳥は其所に落著いて、始めて他の一切を忘却して、專念に自らの歌を歌ふ事が出來るのだ。

「ちちゆう、ちちゆう、ちゆう……」

空の歌は何時の間にか調子が變つてゐた。私は土に塗れた手をかざして、其所と思ふあたりを一心に見入つた。芳醇な酒の樣に空一杯に溢れた日光の中に、やつとの事で私はぽつちりと一つの小さな黒點を見附ける事が出來た。歌謠

の精靈は、胸に押へきれぬ春の歡喜を歌ひ出るのにふさはしい恰好な高みを見附けたのだ。

雲雀はもう上へ昇らうとはしない。獨樂の澄みきつた樣に、じつと一所に小さな翼を浮べたまゝで、のべつに歌ひ續けてゐる。さうだ。まるで獨樂の澄みきつた樣に。遠目にはじつとしてゐる一つの點としか見えないが、あの歌に織りこまれた激しい胸の鼓動はどうだ小刻みに震へてゐる魂の興奮はどうだ。

「ちちゆう、ちちゆう、ちちゆう……」

まるで水晶盤の上へ玉の珠、金の珠をひつきりなく轉ばしてゐる樣な、美しい、潤ひのある音の連續だ。情熱の火花。そ

の火花は、すばらしい速さと、驚くべき自由さとをもつて、あたりに撒きちらされ、日光と融合ひ、交り合つて、霧雨の樣に細かく地べたに降りそゝいで來る。

雲雀は生れつき優れた藝術家だ。そして多くの藝術家と同じ樣に、自分の藝に對する陶醉をもつてゐる。彼は今噴泉の水の樣に高々と胸一杯に盛上り、口をついて迸り出る自分の歌その物の餘りに快活に、餘りに滑かなのに、飽かず聞きほれてゐるらしい。

「ちちゆう、ちちゆう、ちゆう。……」

あの空の臺から專念に歌ひ耽つてゐる「雲切」の歌こそは、友だちの爲でもなく、また雛の爲でもない。全く歌自慢の鳥

自らの爲で、唯懸念されるのは、さうした自己陶醉の餘りに、この歌謠の精靈がつい調子に乘過ぎて、その美しい音律がむだに浪費されはしないかといふ事だけだ。

私は物好きにも小手をかざして、じつと空を見守つてゐた。すると、さつきまでじつとしてゐた黑點が、急にゆら／＼と動き出した。雲雀は稍歌ひ疲れると同時に、ふと大地のかなたに青々とした麥畑の廣がりが眼に附くと、其所に殘して來た巣の事を思ひ出したらしく、はた／＼と緩く兩翼を羽ばたきながら、はすかひに身を沈めて、畑をさして舞ひおりようとしてゐる。

「ちいちくい、ちいちくい。……」

ゆくりなくも

せち辛い

「下げ」の歌だ。ついさつきまで一心に歌ひ耽つてゐたあの「雲切」の、情熱と高揚との噴泉に比べて、何といふ氣拔のした、だらけた聲の連續だらう。――それもし方がない。歌謠の精靈は、あの空の高みでゆくりなくも青草の中の自分の家を思ひ出した一刹那から、せち辛い世渡に憂身をやつすたゞの親鳥となつてゐるのに過ぎないのだから。

雲雀はその親類筋に當る雀が、春の日長さを小唄一つ歌はないで、雛の世話燒や生活向の切盛に忙しい世帶やつれの仲間入りをするには、餘りに藝があり過ぎる。その藝を試みる爲には、彼は何をさしおいても、空の高みに舞上らなければならない。

歌三昧

雲雀はまた、杜鵑が他の鳥の巣に卵を生みつ放しにして、所定めず旅に出る樣な放浪性を眞似るには、餘りに親心があり過ぎる。彼が空の臺で歌三昧の最中、氣紛れにもまた麥畑をさして下りて來るのは、その棄難い親心の爲で、彼はかうして絶えず親心と藝と、麥畑と空の高みとの間を、往きつ戻りつしてその生を終るのだ。

「人間にもそれによく似たのがある。」

私は口の中でつぶやきながら、また腰を屈めて、そこらの土をほじくり出した。

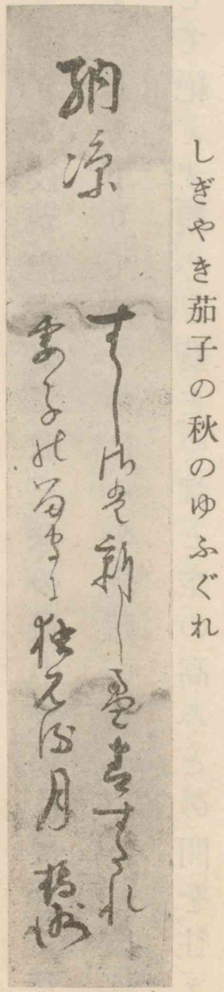
二六　ふじの山

(一)鯛屋貞柳

ふじの山夢に見るこそ果報なれ
　路金もいらずくたびれもせず

(二)唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけり
　しぎやき茄子の秋のゆふぐれ



唐衣橘洲筆蹟

(三)朱樂菅江

天の原月すむ秋をま二つに

(一)本名榎並善八。油烟齋と號した。大阪の人。享保二十年（二三九五年）歿、年八十。

果報

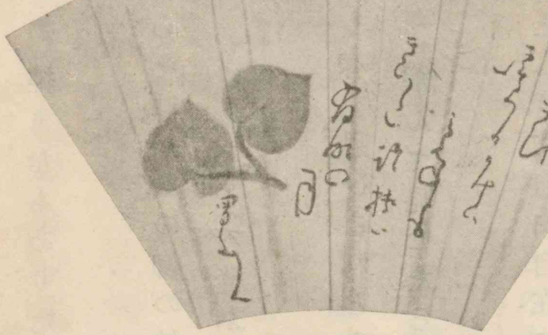
(二)田安家の士。本名小島源之助。江戸の人。享和二年（二四六二年）歿、年六十。

納涼

すゝしさは新し疊青すたれ妻子の留守に獨見る月　橘洲

(三)本名山崎景貫。江戸幕臣。寛政十二年（二四六〇年）歿、年六十三。

　ふりわけ見れば
　　ちやうど仲麿



四方赤良筆蹟

(一)四方赤良

さわらびが握拳
　をふり上げて
山の横面はる風ぞ吹く

ほとゝぎす
　あとにあきれたる
後徳大寺の有明のかほ

(二)宿屋飯盛

歌詠は下手こそよけれ天地の
　うごき出してはたまるものかは

(三)大屋裏住

(一)本名大田覃。南江戸幕臣。畝または蜀山人と號した。文政六年（二四八三年）歿、年七十五。

ほとゝきす鳴つるかけはみえねともきいた證據は有明の月　蜀山人

(二)本名石川雅望。江戸の人。天保元年（二四九〇年）歿、年七十八。

(三)本名久須美孫兵衞。江戸の人。文化七年（二四七〇年）歿、年七十七。

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま
　經よむもありたゞ啼くもあり　鹿津部眞顔(一)

あらそはぬ風の柳の絲にこそ
　堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ　平秩東作(二)

ゆく春を思ひきれとや舞臺から
　飛んで見せたる淸水(三)のはな　つむり光(四)

ほとゝぎす自由自在にきく里は
　酒屋へ三里豆腐屋へ二里　木端(五)

世の中をなんのへちまと思へども
　ぶらりとしてはくらされもせず　馬場金埒(一)

ゆきならばいくら酒手をねだられん
　花のふゞきの志賀の山かご

二七　哲人聖德皇太子

高島米峰(二)

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて、私は先づ聖德太子を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙の能く盡す所でないが、憲(三)法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とする事の切要なのを認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡

(一)本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號した。江戸の人。文政十二年（二四八九年）歿、年七十九。
(二)本名立松懷之。東蒙と號した。江戸の儒者。寛政元年（二四四九年）歿、年六十四。
(三)京都淸水寺。
(四)本名岸宇右衛門。江戸の人。寛政八年（二四五六年）歿、年七十。
(五)栗柯亭。狂歌師。本名未詳。大阪の人。安永二年（二四三三年）歿。

(一)江戸の狂歌師。俗に大阪屋甚兵衛。文化四年（二四六七年）歿。
(二)思想家。名は大圓。明治八年新潟縣に生れた。理想的商業、一休和尚、廣長舌、店頭禪等の著がある。
哲人
(三)第三十三代推古天皇の十二年（一二六四年）四月に定められた。
基調

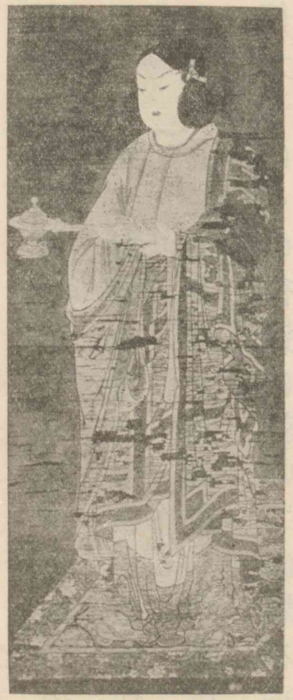
(一)推古天皇の十一年十二月に定められた。十二階とは大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智。
人材登用
閥族跳梁
(二)近江國滋賀郡小野村にゐたので小野と稱した。

明して、建國の精神を振作し、また冠位十二階(一)を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、內政を充實し給うたので、日本の面目は茲に全く一變するに至つたのである。たゞにそればかりでなく、當時世界の最大强國として、最も文化の進步した支那――支那は恐らく日本をその屬國くらゐにしか考へてゐなかつたであらう程、それ程日本の世界的地位は低いものであつた。――と對等の國交を結ぶ事になつたといふのは、實に聖德太子の偉大性の、いかに驚くべきものであるかを看取せしめられるのである。

聖德太子は推古天皇の十五年に遣隋使發遣の事を決定し給ひ、(二)小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發し

(一)胡族を統一して建てた支那の國號。三主三十八年で唐に滅された。(西紀五八九―六一八年)
冒頭

た。この年は隋(一)の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや。」とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那は自ら中國を以て任じ、東夷、南蠻、西戎、北狄と四方の國々を野蠻國あつかひにしてゐたので、日本の如きもいはゆる東夷のうちの一つくらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如として、かうした對等の禮を以て書を贈られたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。しかし、これ



聖德太子像

(一)淀川の河口。

程の國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化をもち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、斐世清といふ者を使者として我が國に遣す事となり、斐世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に著いたのである。この隋使斐世清の報告が、日本を隋と對等のものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇に就いては、頗る心をお籠めになつたらしい。先づ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波の(一)江口に迎へさせ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五匹を以てこれを大

(一)磯城郡。今三輪村大字金屋の内。

棊羅星の如し

金甌無缺

和の海石榴市(つばいち)(一)の衢に迎へ、天皇の詔を賜ふ時には、有司百官が定められた冠位に隨つて棊羅星の如く宮廷に居並んだので、流石の斐世清も、すつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國する時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣す事となり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。流石の隋の煬帝も、斐世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等の國交を結ばなければならない事になり、隨つて支那は、日本を完全な獨立國として、認めなければならなくなつたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、我が國が金

甌無缺の國體を維持して今日に至り、更にその天壤と共に窮りなきを期し得らるるのも、これ等に淵源する所が頗る多いのである。

聖徳太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歴史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、暦法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは、卽ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは卽ち佛教の興隆、最も花やかなものは卽ち日隋對等の國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讚歎し奉る所以なのである。

惟ふに日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帶びさせら

(一)第三十七代。
(二)舒明天皇の皇子。

れた方は、僅かに御三方しかましまさぬ。しかもそのうちの御二方が、共に二十代の青年でこの大任を帶び給うたといふ事は、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。そのいはゆる攝政皇太子の御三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖徳太子、齊明天皇(一)の攝政皇太子中大兄皇子(二)、及び今上陛下卽ち前の攝政皇太子裕仁親王殿下にましまし、聖徳太子は二十歳、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歳の時に、そして私たちの敬愛し奉る前の皇太子殿下は二十一歳の時に攝政の大任を帶びさせられる事となつたのである。聖徳太子攝政の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が内に充實し、外に躍進したといふ事實から考へ合せて、

どうしても昭和の日本もまた、我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威德に依つて、更に一段と內に充實し、外に躍進すべき事を、確信せざるを得ないのである。

帝國實業讀本巻四 終

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月三日發行
昭和八年七月十七日訂正再版印刷
昭和八年七月二十日訂正再版發行

版權所有

帝國實業讀本

定價
自巻一至巻六 各金六拾錢
自巻七至巻八 各金五拾四錢
自巻九至巻十 各金五拾壹錢

編者 芳賀矢一
訂補者 上田萬年
同 長谷川福平

東京市神田區神保町一丁目三番地
發行兼印刷者 合資會社 冨山房
同所合資會社冨山房社長
代表者 坂本嘉治馬

東京市小石川區音羽町七丁目六番地
印刷所 冨山房印刷部

東京市神田區神保町一丁目三番地
發行所 合資會社 冨山房
電話神田二二七一―二二七八番
振替口座東京五〇一一番

野本製